

雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する 調査と研究（1）

西南中国民族建築研究会
代表 浅川 滋男

1. 研究の概要

1-1. 研究の目的

雲南といえば、東南アジアに隣接する照葉樹林帯の中核的地域というイメージをいだく人が少なくなかろう。しかしながら、雲南省の面積は394,000km²と広大であり、南と北では自然・文化の様相が大きく異なっている。省全体は雲貴高原に属する高地だが、その内部ではさらに西北に高く東南に低い地勢の傾向があって、私たちが調査を進めている西北部は、チベットおよび四川に隣接する高山地帯（海拔2,500～3,000m）を形成する。後述するように、この地は、先史以来「羌」系の遊牧民族が断続的に移住・進入してきた山岳地域で、現在でも、放牧と雑穀栽培を生業とするチベット・ビルマ（蔵緬）語族系の諸民族が伝統的な生活を営んでいる。この点において、タイ系の稲作農耕民族が多数を占める南部の盆地

地域とは、かなり異質な民族史的背景があり、大ざっぱに整理するならば、北部はチベットと、南部は東南アジアと、それぞれ密接な文化的系譜関係をもっているのである。

本研究は、表題のとおり、フィールド・ワークを通して、雲南省ナシ族の居住様式と建築技術の理解を深めようとする試みであるが、初年度はナシ族にかぎらず、西北雲南のチベット・ビルマ語族の住居をひろく調査することにした。南部の稲作農耕民とは大きく異なる西北地域の放牧・雑穀栽培民の住居の特質を、より広域的な視野から解明することに主眼をおいたのである^{※1}。このため、西北雲南の建築的源流をさぐることに視野をひろげ、チベットでも若干ながら調査をおこなった。要するに、ナシ族とその近親諸民族の住居・建築技術のバックボーンを、体験を通して把握することが、初年度研究の



図1 調査地の位置

大きな目的であった。

1-2. 調査の経過

これまで、3次にわたる調査をおこなった。その概略は、以下のとおりである。

第1次調査／1991年10月23日～10月30日

現地の共同研究機関である雲南省社会科学院(昆明市)を訪れ、今後の調査計画を何耀華院長と協議するとともに、調査地となる楚雄・大理・麗江を駆足で訪問し、第2次調査以降の対象村落・建築物の下見と選定をおこなった。この予備的調査には、委員のなかでは主査の浅川が参加したのみだが、国立歴史民俗博物館の濱島正士教授の同行・協力をえた。

第2次調査／1992年5月16日～6月8日

委員のうち浅川、小野、杉本、溝口が、楚雄、大理、麗江、寧蒗、永寧などで、イ(彝)族、ペー(白)族、ミャオ(苗)族、ナシ(納西)族、モソ(麼些)人の住居と集落を調査した。また、江口委員が6月6日～24日に同じ地域で、チベット・ビルマ語族の言語学的調査に携わった。

第3次調査／1992年7月13日～7月18日

日本学術振興会の派遣研究員として中国社会科学院考古研究所に在籍していた主査の浅川が、単独で西藏自治区ラサ市を訪れ、チベット(蔵)族の農家を調査した。

1-3. 本報告の執筆

この概報の原稿は、浅川、小野、溝口の3委員が、以下のように分担執筆し、全体を浅川が監修した。

第1章 浅川

第2章 浅川

第3章 No.1～11 小野(集落・植栽)
溝口(建築)

No.12 浅川

第4章 浅川

2. 西北雲南の少数民族

2-1. 「羌」系古民族の活動

ナシ族をはじめとする西北雲南の少数民族が、中原・西域方面に起源する古代の遊牧民であるといえば、いささか驚きを禁じえない読者も多いことだろう。しかし、その源流を古代の「羌」系諸族とみる解釈は、近年の雲南民族史研究ではかなり定説化しているといってもいい。ここではまず、おもに『納西族簡史』[1984]にしたがって、羌とその周辺諸民族の動向を、ナシ族の源流とからめつつ概括しておきたい^(注2)。

(1)「羌」の起源

「羌」の本義は、後漢時代の字書『説文解字』にみえる。その羊部には「羌は西戎にして、羊を牧う人なり。羊に従い、人に従う」とある。甲骨文にもすでに羌の字

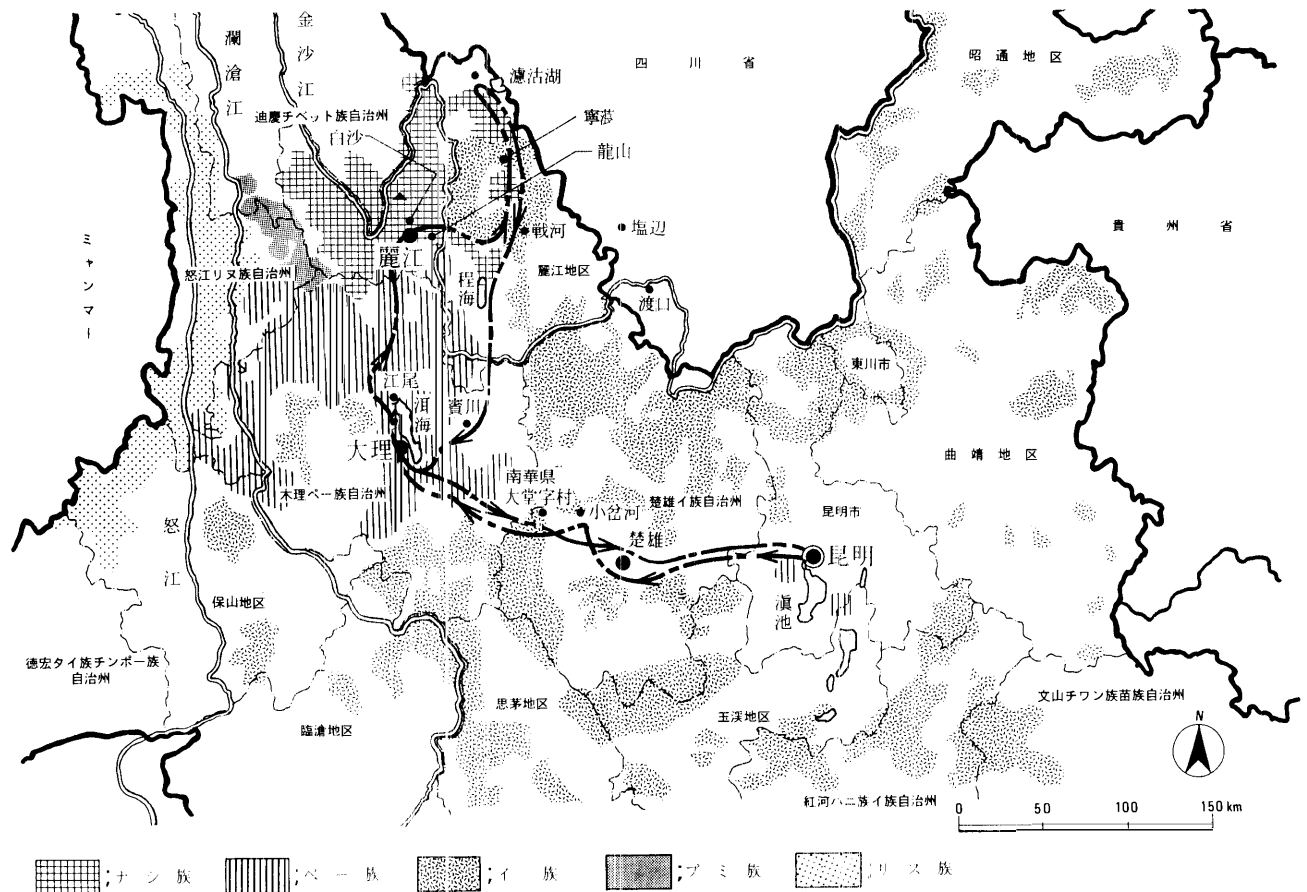


図2 雲南省北部におけるチベット・ビルマ語族の分布と調査行程

があり、字はまた「羊に従い人に従」^{さかのぼ}っていて、羌の活動が遅くとも殷周時代に遡ることを教えてくれる。ここにみるように、「牧羊に携わる西域の異民族」が羌の初義であった。『説文』が羌と同義にみる「西戎」については、さらに早い文献記載がある。たとえば『礼記』王制には、「西方は戎という。被髪・衣皮し、粒食せざる者あり」という古代遊牧民の習俗が記されている。ここにいう被髪（冠をつけず毛髪をばらばらに乱したままの髪型）・衣皮（皮製の服を着る衣文化）・不粒食（穀物を食べない食生活）は、いずれも西戎＝羌の文化を特徴づけるキーワードとして、注目すべき要素である。

一方、正史にみえる神話においては、驚くべきことに、中華帝国の始祖たちが羌の始祖としても登場する。たとえば『史記』六国表は、華夏族の夏王朝を創建した「禹」が「西羌を興」したといい、しかも『索隱』の注によると、禹は「茂州汶川県に生まれ、もとは冉駹国にしてみな西羌なり」とある。『後漢書』西羌伝には、夏王朝の夏桀の時になって、河関羌地一帯の羌人の一部が東に向かい、陝西省の渭河・涇河流域地帯に進出しはじめたという記載がある。殷の時代になると、殷王武丁が「西羌を征つ」こと3年、ここに「彼の氏羌より、敢えて来享（自分の領地の産物を献上すること）せざるはなく、敢えて来王（蛮族の王が即位した時、中国の天子にお眼通すること）せざるはなし」（『詩』商頌・殷武）となった。いずれの記録も、羌と初期中原文明の係りの深さをよく示している。

羌の原住地についても、『後漢書』西羌伝に記載がある。

河関の西南は、羌の地これなり。賜支に濱^そいて河首に至り、地は千里を綿なる。……南は蜀漢^{きやう}の徼外（国境の外）に接する蛮夷なり。……居^おるところ常なく、水草を随うに依りて、地は五穀少なく、産牧をもって業となす。その俗は氏族に定めなく、或は父の名と母の姓をもって種号となす。

ここにみえる河関とは、今の甘肅省臨夏県にあたり、黄河支流の大夏河・洮河の流域に位置する。河関の西南は、千里の地ひろがる羌の地であった。『漢書』地理志の金城郡には河関県の名もみえ、その注に「積石山は西南の羌のなかにあり」といい、今の青海省河湟地区も羌の遊牧した地域とみなしうる。

（2）蜀漢徼外蛮夷について

『後漢書』西羌伝によると、羌の地の南には「蜀漢徼外蛮夷」がいた。〈蜀漢徼外蛮夷〉とは、『史記』西南夷列伝にみえる〈蜀漢西南外蛮夷〉と同義とみなされ、滇・邛都・夜郎・犍・昆明・徙・冉・駹・白馬・筰都などの地方（集団）をさしている。成都平原をとりまく山間河谷地帯に分布したこれらの集団は、やはり羌人と密接な関係をもっていた²³⁾。

①白馬： 漢代の初めに広漢郡に属したが、漢の武帝

は広漢の西の白馬に武都郡を置いた。今の甘肅省南部の武都・文県・康県一帯と陝西省の西南隅にあたる。『後漢書』地理志の武都郡では、応劭をひいて「いにしえの白馬氏羌なり」と注している。

②冉と駹： 今の四川省西北の茂汶地区にあたる。『史記』西南夷列伝・正義のひく『括地志』は、「蜀の西の徼外の羌は、茂州・冉州のもと冉駹国なり」という。『後漢書』西南夷伝には、「冉駹夷は武帝の開するところ、元鼎六年以って文山郡をなし、……その山に六夷・七羌・九氏ありて、各々部落あり」とみえる。

③徙： 『史記』西南夷列伝・集解によれば、漢嘉にあった。漢嘉は前漢の蜀郡青衣県の改名で、後漢に漢嘉郡（蜀郡の属国）の治となり、その領内に徙・旄牛などの県が置かれた。旄牛は今の太渡河上流の瀘定地区、青衣は今の雅安地区にあたる。この一帯はまた、沫水流域の古代摩族と羌族が活動した地域である。

④筰都： 『史記』西南夷列伝・集解によれば、越嶲にあった。『後漢書』西南夷伝は「筰都夷は武帝の開するところ、以って筰都県となし、その人みな被髪・左衽（着物を左前に着る習俗）す」という。筰都夷もまた、羌人の被髪習俗を有していた。両漢の越嶲郡には、いずれも定筰・筰秦・大筰の諸県があり、その地は今の雅龍江流域一帯であった。『史記』西南夷列伝・正義のひく『括地志』には、「筰州。もとは蜀の徼外にあり、猫羌」とある。〈猫^マ〉はすなわち〈旄^マ〉で、〈摩^モ〉〈磨^モ〉〈旄^マ〉〈髳^マ〉などの同音異字であり、いずれも羌人の地方集団とみなされる。

⑤犍と昆明： 洱海以北の麗江地区内の金沙江流域地帯にあった。『史記』西南夷列伝に「犍と昆明はみな編髪し、畜の遷徙に随う。定住するところはなく、君長もない。地はよく千里四方を数える」とみえる。髪を編む習俗（編髪）は羌人被髪習俗の変型であり、遊牧する民でもあって、犍・昆明はやはり羌の地方集団だった。

⑥邛都： 今の四川省西昌地区にあたる。漢代には越嶲郡の統治をうけた。現在ナシ族の主要集住域である麗江地区は、越嶲郡領の郊外地であった。

ここに列挙した古民族は、いずれも遊牧を生業とし、被髪／衣皮／不粒食／左衽／火葬などの習俗を共有する、羌系の民であった。青海・甘肅の乾燥高原地帯から成都盆地周辺の山間河谷部、さらには西北雲南の麗江と洱海地区に至る本研究の対象地までが、かれらの移民と活動の舞台だったのである。

（3）考古学からみた南遷の年代観

羌系の民族集団が、いつ頃からこの広大な南方の地に拡散しはじめたのかは定かではない。文献の上では、戦国時代初期の秦の強大化にともなう羌の南遷の記事が『後漢書』西羌伝などにみえるが、もちろんそれ以前から、かれらの民族移動ははじめていた。これについて、

考古学的データを積極的に羌の文化要素に結びつけようとする試みがある。

雲南省博物館長の李昆声は、「論雲南與黃河流域新石器時代文化的關係」[1985]という野心的な論文において、陶器・住居址⁴⁴⁾・石刀などの物質文化を比較し、新石器時代における中原と雲南との文化交流を羌の南遷の結果とみなす解釈を示している。一方、同館員の張増祺は、「“摩沙”源流考略」[1987]という論文において、ナシ族（モソ人）の集住する雲南省麗江や四川省塩源などで出土した石棺墓に着目し、その分布状況から、これを羌系に属する「白狼＝摩沙」の遺物と推定した。石棺墓の¹⁴C年代はB.P.2900±100年、すなわち紀元前10世紀頃にあたる。以上の諸論にしたがえば、羌系古民族の雲南への侵入は、殷周時代から新石器時代にまで遡ることになる。

（４）〈摩沙夷〉をめぐる

さて、この〈摩沙夷〉であるが、『華陽国志』蜀志によると、すでに3世紀の初めには、越嶲郡の定筰県（今の四川省塩源）にいた。また、『蛮書』名類第四には、唐代8世紀末に今の麗江の金沙江流域と塩源の雅砻江流域にも〈磨些蛮〉が分布した、という記載がある。ここにみえる〈摩沙〉〈磨些〉の音声は、今日のこの地区のナシ族の呼称〈モソ〉と完全に一致する。その後も李京『雲南志略』では〈末些〉、『元史』では〈摩娑〉〈磨些〉〈摩麼〉、『南詔野史』（胡蔚贈丁本）では〈摩荻〉、『清史稿』では〈麼麼〉、段鵬瑞『塩井郷土志』では〈摩梭〉と、いずれもモソに近い音声表記が残されている。

古代の河川名称にも注目しておく必要がある。現在、四川西部をながれる大渡河は古代に〈沫水〉とよばれた。沫水の命名は、まさに古代の摩族（末些）がこの河流域で活動したことによる。『水経注』に、「青衣水は青衣県の蒙山を出、東して沫水と合す。（青衣）県はいにしえの青衣羌国なり」とあり、沫水流域に居住した摩族（末些）も古羌人の末裔であった。

以上の史料からだけでも、羌→摩沙夷（磨些・蒙族・末些）→ナシ族（モソ人）という民族の系譜をたどりうるだろう⁴⁵⁾。

2-2. 西北雲南のチベット・ビルマ語族

チベット・ビルマ（蔵緬）諸語は、東南アジアにおいて他のいかなる言語グループよりも多くの構成員をもち、今まで優に200をこえる同系の言語が確認されている[ラムゼイ 1990：p.314-351]。西南中国では19の言語がこのグループに属し、中国言語学の分類によると以下の4語支12言語、および語支未定の7言語に分かれる⁴⁶⁾。

- ①チベット（蔵）語支：チベット、ギャロン（嘉戎）、メンパ（門巴）

- ②チンポー（景頗）語支：チンポー

- ③イ（傣）語支：イ、ハニ（哈尼）、ナシ（納西）、リス（傈僳）、ラフ（拉祜）、チノー（基諾）

- ④ビルマ（緬）語支：アチャン（阿昌）、ザイワ（載瓦）

- ⑤語支未定：ペー（白）、プミ（普米）、ヌー（怒）、チャン（羌）、ロッパ（珞巴）、トゥロン（独龍）、トゥチャ（土家）

雲南には現在、4,000人以上の人口が定住する少数民族が25種いて、そのうちチベット・ビルマ語族が13種と過半数をしめる[李・陳 1990]。とくに北部では、図2に示したように、イ族、ペー族、ナシ族、リス族、プミ族の5つのチベット・ビルマ語族で少数民族地図のほぼすべてが塗りつぶせる。ナシ族については、つぎに詳述するとして、他の4民族の沿革をまずは概説しておきたい⁴⁷⁾。

（１）イ族

雲南のほか、四川、貴州、広西などのひろい地域に居住するチベット・ビルマ語族で、雲南少数民族のなかでは人口が最も多く、1988年の統計で3,784,379人、全省人口の10%をしめている[李・陳 1990]。言語的にナシ族と関係が深く、やはり氏・羌系の古代遊牧民族を祖先とする一群とみなされる[馬学良等（編）1989]。漢代には滇池と邛都（四川西昌）を活動の舞台としていた。8世紀、今の大理に蒙氏によって建国された南詔国は、イ族を主体とするチベット・ビルマ語族の国家であった。唐・宋時代の「烏蛮」、元・明時代の「爨」^{ツァン}「羅羅」^{ロロ}もイ族先民の呼称である。

（２）ペー族

雲南省のほか、ごく一部が貴州省にも住むチベット・ビルマ語族で、漢族からは長く「民家」とよばれてきた。大半は洱海周辺の大理地区を居住地とする。雲南少数民族のなかで、人口はイ族につぎ、1988年の統計では1,265,652人である。『白族簡史』[1988]によると、秦・漢時代の「爨」、漢・晋時代の「叟」、唐代の「西爨白蛮」などが、いずれもペー族の祖先にあたる可能性があるという。言語的には語支未定で、周辺のイ語やナシ語とは異質な側面が多く、これは早くから漢民族と接触してきた文化受容の足跡を反映するものかもしれない。

さて、唐代に蒙舍詔が六詔を統合して建国した南詔国は、おもにイ族とペー族の連合国であったが、南詔の崩壊後937年に勃興した大理国は、ペー族の段氏が建国したものであった。この王国は、1253年のモンゴル帝国による侵略まで存続する。なお、ペー族の民家は、華麗な装飾をもつ漢族的な閉鎖中庭型住宅で、かなり早くから注目をあつめてきた[雲南省建工庁設計院 1963]。漢族との文化交流なしには、成立しえない住居形式であり、この民族の文明化＝漢化の歴史をよく映しだしている。

(3) プミ族

やはり語支未定のチベット・ビルマ語族⁽⁸⁾で、民族の源流についても不明なところが多い。『中国大百科全書 民族』[1986: p.364-366]によると、「西蕃」とよばれたプミ族は、もともと青藏高原にいた遊牧民族で、徐々に温暖な地方に南下してきた。13世紀には四川省西昌地区の主要民族だったが、元が大理国を攻めるさい、西昌プミ族の一部がモンゴル軍に加わり、麗江・寧浪・永勝・維西などの地に進出し、そのまま定住したという。人口は少なく、1988年の統計で27,812人である。

(4) リス族

イ族およびナシ族と深い係りを持つ民族で、言語はイ語支に分類される。リスの名は、唐の樊綽『蛮書』に「栗栗」と見えるのが初見で、当時は「烏蛮」の一部とみられていた。それ以前の歴史については不明だが、『傈僳族簡史』[1983]は、言語やトーテムからみてイ族とリス族は同源であり、漢代の「叟」「徼」「靡・漠之属」、晋代の「黒爨」などをその先民として推定している。

人口は541,830人(1988年)。唐代には金沙江流域を居地としていたが、戦争や土司の支配からのがれるため西遷し、現在は怒江流域をおもな分布地とする⁽⁹⁾。

2-3. ナシ族文化の概要

(1) ナシ族とモソ人

ナシ族は、雲南省西北と四川省西南の金沙江上流域に居住する。1988年の統計によると、人口は260,388人。呼称はいささか複雑だが、おおまかにいうと東部はモソ<麼些>、西部はナシ<納西>である。もっともこの2つの呼称は、ともに漢族による他称であって、自称はna,naxi, nazzなどいずれもナシに近い音声をもつ。ここにいうnaは族名、xi,zzは「人」を意味するナシ語で、納西の<西>はxi、麼些の<些>はzzの漢語表記とみる意見もある。

さて、自称は近似するものの、言語・文化の諸側面において、東のモソ集団と西のナシ集団では、かなり大きな差異がみられる。とくに宗教ではモソが東巴教、ナシがラマ教をそれぞれ信奉し、方言の地域差も小さくないことなどから、モソ集団はナシと同一民族視されることをきらい、ナシとは異なるというつよい民族意識をもつようになっている。この結果、従来はたんなるナシの地方集団と位置づけられてきたモソ集団は、近年「ナシ族」から半独立した民族集団として、「モソ人」⁽¹⁰⁾とよばれるようになってきた。

(2) 永寧モソ人の母系社会

雲南ナシ族の社会は総じて父系原理を基盤としているが、寧漢イ族自治州北部の永寧モソ人のみ、母系制の家族形態を今に伝えている⁽¹¹⁾。

モソ人の母系家族⁽¹²⁾は、イトゥ<一度>とよばれる。

イトゥは、母系の系譜関係でつながった数世代のメンバーから構成される。具体的にいうと、女家長を筆頭にして、家長の兄弟姉妹、家長および家長姉妹の子供、家長の下世代の女たちが産んだ子供たちがイトゥのメンバーとなる。

注目したいのは、アチュ<阿注>婚とよばれる婚姻形態である。アチュとは、「友達」を意味する。かれらの社会に「妻」や「夫」という概念は存在しない。男が女の部屋に忍びこみ、関係が成立した段階で、この男女はアチュとよびあうようになる。はじめは、二人の関係をおおやけにせず、娘は男をひそかに寝室にまねき入れ、男は夜明けまでにこっそり帰っていく。しかし、日がたつて家人に二人の関係が知られると、男は人目をばからず、女の家で堂々と出入りするようになり、主屋のイロリ端でもやま話をしたりする。

アチュの関係はたんに性的なもので、経済的に独立した「夫婦」関係は存在しない。男は女の部屋に出入りするようになって、あくまで自分を産んだ母親の所属するイトゥのメンバーなのである。アチュの関係は永続的なものではない。関係の継続する期間はふつう数年で、短ければ1~2年、長ければ数十年になる場合もあるという。平均してみると、男女とも一生のうち、そのパートナーを6~7人替えることになり、女の所属するイトゥでは、父親の異なる複数の子供がそだっていくのである[馬寅(主編) 1987: p.278-283]。

本研究の軸となる大きな目的の一つは、このようなアチュ婚を軸とする母系社会の構造が、モソ人の住まいにいかにか投影しているのか、あるいはいかに係るのかを解明することである。

3. 調査報告

(1) 南華県小岔河村／イ族

楚雄市の西郊に位置するイ族の村で、4つの自然村からなる。人口は191人で、漢族の一人をのぞく190人がイ族である。実測調査をおこなった「姑娘房」^{クワンヤンフアン}をふくむ集落は、谷筋の北側丘陵中腹の比較的急勾配の斜面に立地する。石積みや法面で勾配を処理しながら平坦面^{たん}を造成し、そこに住宅や家畜小屋などを建てる。各住宅は、かなり正確に南向きに建てられている。

住居は主屋前面に庭をとり、付属屋を周囲に配置する前庭型もしくは中庭型である。主屋はすべて切妻造の瓦葺で、柱梁構造に版築壁という構成を持ち、漢化が顕著に進行している。ただし、家畜小屋や倉庫などの付属屋には、丸太校倉風の累木式構造のものが多く、実測調査したのは、集落の端に位置する姑娘房である。

実測家屋No.1:少女の小屋<姑娘房> 西南中国の様々な少数民族社会において、未婚男女の恋愛の舞台となる公的施設の存在が知られてきた。たとえば、貴州ト

ン族には未婚の男性の集う場としての「羅漢樓」があり、また、清の李宗肪『黔記』には八寨黒苗の村落に未婚の女性が夜毎集いあう「馬郎房」が存在したという〔戴裔 1948〕。さらに、海南島リー一族にもブロンカウと称する少女の小屋があり、そこでさかんに逢ひ引きがおこなわれる〔浅川 1991〕。

小岔河村のイ族調査集落における〈姑娘房〉も、同類の施設である。姑娘房はイ語では「ゾマイへ」^(注13)とよばれ、通常では村に1～2棟あるという。この集落では、今も使用されている。夜につれあいを求める、あるいは恋愛中の未婚の男女が姑娘房にきて語りあう、一種の公的な「デート」の場である。ただし、この姑娘房でのデートは、婚姻の強制をともしない。インフォーマントの紫氏（30歳）も昔は、この姑娘房を利用したという。

家屋は、2間取りの土間式平屋建築で、切妻造の平入り、累木式の壁構造とする。校木間のすき間が大きく、継手・仕口の技術はとても巧妙とはいいがたい。中央間仕切壁と外壁取り合いには管柱を入れて、校木のずれを防いでいる。開口部も同様に管柱を入れて校木を止める。枠は溝を彫り差し込んだ板状の簡単なものである。小屋根組は、妻側に棟束を使うだけの束立で、棟束下端を削り込み、妻壁の校木に差し込む。現在、南側の部屋には寝台が3か所あり、女性が寝泊まりするという。北側の部屋は物置として使われる。

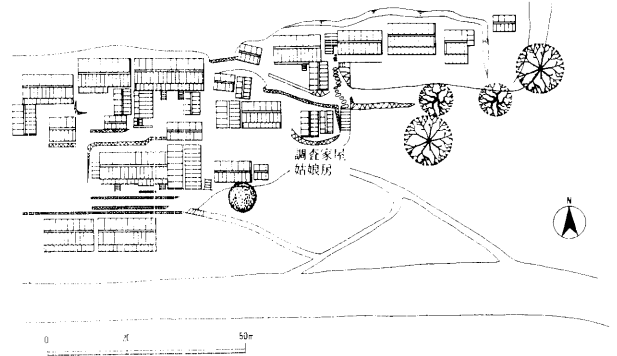


図3 南華県小岔河村・集落配置

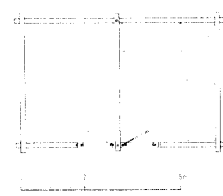


図4 a. 小岔河村（イ族）の姑娘房（No. 1）平面図

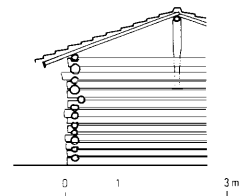


図4 b. 断面図

写真1
南華県小岔河村の
〈姑娘房〉



表1 実測家屋一覧

家屋番号	対象家屋名	配置形式	平面形	構造形式	屋根	建築年代	家族制度	世帯構成員	民族	所在地
No.01	姑娘房	外庭式	長方形2室	累木式壁構造・束立	切妻・瓦葺		父系		イ族	楚雄彝族自治州南華県小岔河村
No.02	紫 有義宅	外庭式	長方形3室	柱梁構造・穿闘式・外壁版築壁	切妻・木瓦葺	1985年	父系夫方居住	7人（男5・女2）	イ族	楚雄彝族自治州南華県大堂子村
No.03	魯 世昆宅	外庭式	L字形4室	版築壁構造	陸屋根・土葺	1972年	父系夫方居住	5人（男2・女3）	イ族	楚雄彝族自治州南華県大堂子村
No.04	陶 紅耀宅	開放中庭式	長方形8棟	主屋・厨房：柱梁構造・版築壁、家畜舎：累木式壁構造・束立	主屋・厨房：切妻・瓦葺、家畜舎：切妻・板葺	北主屋1965年、南主屋1970年	父系夫方居住	2世帯10人（男6・女4）	ミャオ族	麗江県龍山郷当牛龍村
No.05	李 良富宅	閉鎖中庭式	コ字形10室	柱梁構造・外壁石積壁	切妻・瓦葺	60～70年前	父系夫方居住	5人（男3・女2）	ナシ族	麗江県白沙郷玉湖村
No.06	楊 英華宅	開放中庭式	ロ字形7棟	主屋・厨房：柱梁構造・版築壁、家畜舎：累木式・束立	平屋の家畜舎のみ切妻・板葺、他は切妻・瓦葺	約80年前	父系夫方居住	5人（男3・女2）	ナシ族	麗江県龍山郷四村
No.07	麗江古城翠文段の町並み	町家式	長方形	柱梁構造・外壁磚積壁	切妻・瓦葺	清～民国	父系夫方居住		ナシ族	麗江県新華街翠文段
No.08	ソナミ アナ宅	開放中庭式	ロ字形	ラフ経堂のみ柱梁構造・版築壁、他は累木式壁構造	ラフ経堂のみ切妻・瓦葺、他は切妻・板葺	約60年前	母系大家族・アナ族婚	20人（男6・女14）	モソ人	寧蒗県永寧郷永寧行政村
No.09	クア ツェラツォ宅	開放中庭式	ロ字形	ラフ経堂のみ柱梁構造・版築壁、他は累木式壁構造	ラフ経堂のみ切妻・瓦葺、他は切妻・板葺	100年以上前	母系大家族・アナ族婚	10人	モソ人	寧蒗県永寧郷落水自然村
No.10	陳 漢宅	開放中庭式	長方形3室・主屋	柱梁構造・外壁石積壁	切妻・硬山・茅葺	約100年前	父系夫方居住	5家に分家	へー族	大理市中陽和村五社
No.11	張 承祖宅	閉鎖中庭式	ロ字形・四合五天井	柱梁構造・外壁版築壁	切妻・木瓦葺	100年以上前	父系夫方居住	4世帯が分割利用	へー族	大理市喜洲鎮市戸街
No.12	シャマ宅	閉鎖中庭式	コ字形5室	日干煉瓦壁・木柱併用	陸屋根・土葺	不明	父系夫方居住	5人（男3・女2人）	チベット族	西藏自治区拉萨市チョゴ村

(2) 南華県天申堂郷大堂子村／イ族

楚雄市の西北西、大理へ向かう幹線道路の北側の丘陵に所在する。住民は全員がイ族で、26戸・96人の規模である。水田は集落から少しはなれた谷筋の低地にあり、畑や果樹園は集落の周囲に配される。約4,000㎡の平坦な広場が集落の西端に、その半分ほどの広場が東端にある。前者は、調査時には麦の乾燥や脱穀に使われ、後者は薪置場となっていた。いずれも、村落共用のオープンスペースであり、共同井戸も集落北端に設けられていた。

住宅・家畜小屋・トモロコシ乾燥小屋は、集落内の道路に面し、ほとんどが外庭型である。ただし、1戸だけ中庭式の平面を持つ家がある。住宅は漢化した柱梁構造・土壁・本瓦葺のものと、土着的な壁構造（版築）・陸屋根のものがある。家畜小屋は、累木式で陸屋根または本瓦葺である。

集落内に見られる樹木はナシ（梨樹／[サドゥリ]）、リンゴ（^{ビンゴ}蘋果）、クルミ（^{ホーク}核桃）で、いずれも食用である。

実測家屋No.2：紫有義氏宅 1985年の建造で、土間式2階建の建築。柱梁構造をもつ漢化住居の典型であり、屋根は切妻造の瓦葺、外壁は版築壁とする。小屋組は貫を2重に重ねる穿闘式で、部材には松を使用している。漢族の大工が建てたといい、後述する魯宅とは対照的である。集落には、これと同じ漢化した住居がかなりある。平面は桁行3間で、前面に走廊[ショツツー]を通し、中央間[トゥウオヘー]には北寄りにイロリを設け、南北の辺間[ヤッヘー]は寝室とする。2階は物置とし、米・トモロコシ・木材・豚の薫製を収納していた。紫有義夫婦、長男夫婦そのと子供、次男、三男の計7人が居住する

実測家屋No.3：魯世昆氏宅 1972年前後の建築で、陸屋根・平屋建・版築壁の壁構造とする。紫宅とは異なり、村人が共同で建てた。漢化以前の土着的な建築手法をよく示している。紫宅も、建替以前は魯宅と同じ平屋・陸屋根の建築であった。漢語では「土掌房」と表現され、チベット系の諸族に卓越する住居形式である。楚雄から大理にいたる山村でも、数多くみられる。

平面は3間構成の東南角に、角屋状に部屋が張出したL字型平面である。中央間と東南角の部屋は炉[アッドツベ]をとめない、いずれも[ズベリヘ]とよばれる。中央間にはカマドが設けられている。[ヒーダーチャ]という南の間は、瓶や壺が並び、食料を貯蔵する。北の間を寝室[イダーチャ]とする。71歳の老母、息子夫婦と2人の子供の計5人が住む。

住居の脇に取りつく豚小屋は累木式で、195×160cmと小さく、片流れの土葺の屋根とする。校木は径のばらつきが大きく、井桁状に木材を積み上げた状態に近い素朴なもので、継手・仕口の技術は進んでいない。

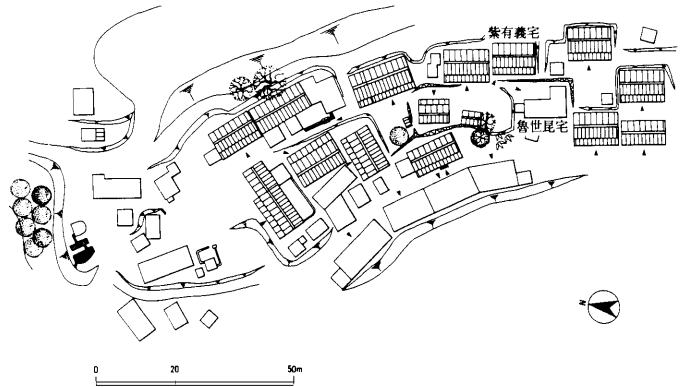


図5 南華県天申堂郷大堂子村・集落配置

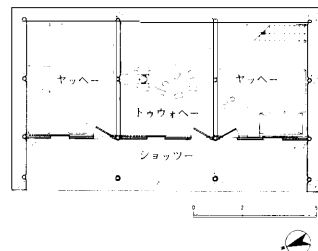


図6 a 大堂子村・紫有義氏宅 (No. 2) 1階平面

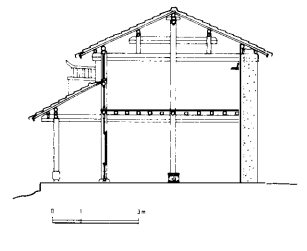


図6 b 断面図 (No. 2)

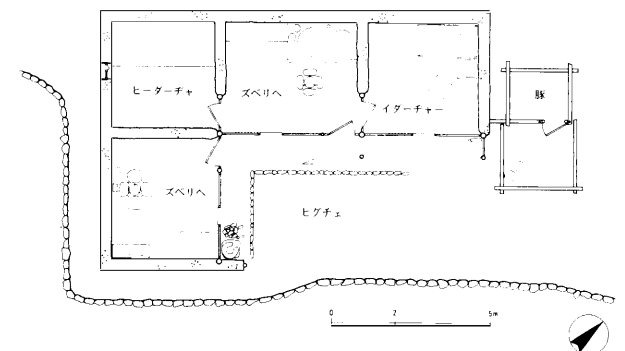


図7 a 大堂子村・魯宅 (No. 3) 平面図



図7 b No. 3 断面図

写真2 南華県大堂子村に残る累木式構造・陸屋根の家畜小屋（イ族）

(3) 麗江県龍山郷当牛龍村／ナシ族・ミャオ族

麗江市東郊に位置するナシ族の村。村落は散居村で、領域の明確な集落を形成しているわけではない。39戸のうち38戸がナシ族で、建物の実測調査をおこなった陶家1戸だけがミャオ族である。ただし、陶家の家屋は村のナシ族の大工の手によるものであり、すべてナシ風にできている。

陶家は、敷地内に長男、次男の世帯が分家して住んでおり、計3世帯からなる。斜面地にあるため、石積みや法面で勾配を処理しながら平坦面を造り、住宅や倉庫、家畜小屋などを建てている。住宅は前庭型である。

畑は屋敷の周囲にあり、ゆるやかな斜面部分はそのままで、勾配の強い場所は段々畑にする。住宅周辺に植栽している木は、リンゴ(苹果)、ナシ(梨樹)、クルミ(核桃)、ヤナギ(柳樹)など、食用となるものが主である。

実測家屋No.4：陶紅糧氏宅 東下がりの斜面、西面山寄り北に平屋(以下、北主屋と仮称)、南に2階建の住居(以下、南主屋と仮称)と釜屋を配置し、庭を取りか

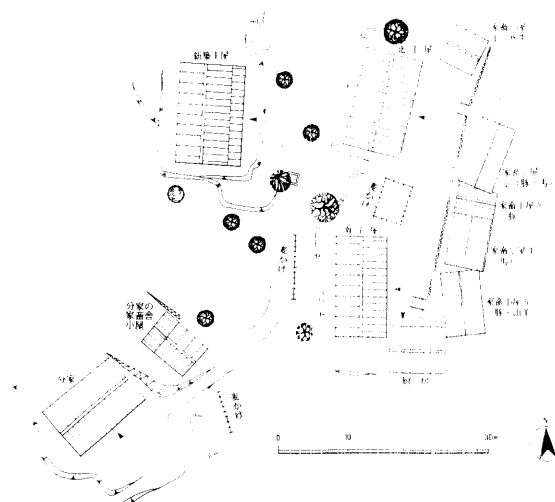


図8 a 龍山郷部当牛龍村・陶宅 (No. 4) 配置図

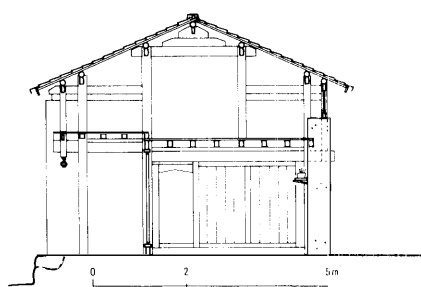


図8 c No. 4 南主屋断面図



図8 c No. 4 北主屋妻壁立面

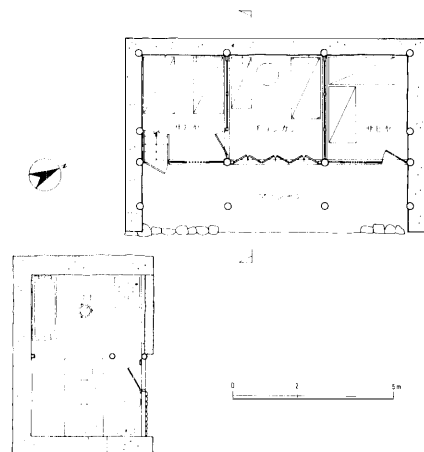


図8 d 当牛龍村・陶宅 (No. 4) 南主屋+厨房平面

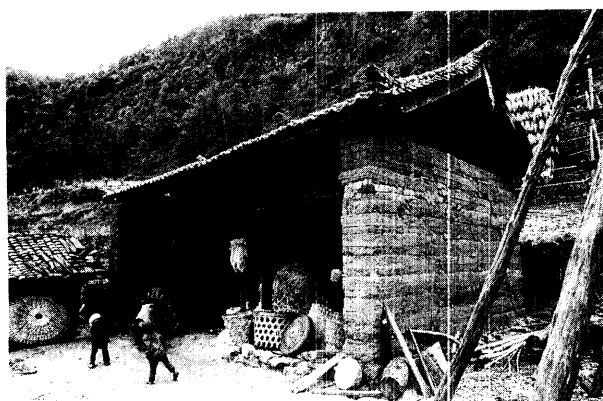


写真3 龍山郷部当牛龍村・陶宅 (No. 4) 南主屋

こむように北から東にかけて家畜舎を5棟並べる。新しい南主屋に陶夫婦と三男、四男が住み、北主屋にはカマドの火を分けて分家した形で次男夫婦が住む。また西面1段上がった斜面には長男夫婦の住居があり、一族3世帯がまとまって住んでいる。嫁はいずれも他のミャオ族の村から嫁いできているが、3人の娘のうち2人は同じ村のナシ族へ嫁がせており、民族を限定するような婚姻規制はないという。

南主屋は1970年の建造である。土間式・2階建の建築で、切妻・瓦葺・柱梁構造、3方を版築壁とする。中央小屋組は、梁上に横材を2段に重ねて棟木を支え、束を用いない。この点で北主屋と異なる。側では貫を2重に重ねる。部材は松を使用している。

平面は、中央間〔チョンガン〕と両脇間〔サビヤ〕からなる3間構成で、前面の吹放し領域は〔マージャン〕とよばれる。中央間前面を扉とし、両脇間は格子とする。3室いずれも寝室として用いる。

南主屋東南に建つ厨房は、平屋建・切妻・瓦葺の建物で、3方を版築壁とする。3年前に建てられた。前面西半分は日干煉瓦でふさぎ、東半分は板材で覆う。南背面は、母屋桁を版築壁上に直接載せる壁構造で、小屋組は南主屋と同様、横材を3段に重ねて棟木を支える。

平面は1室で、東半部には3口の大きなカマドを設ける。西半部は中央にイロリ〔ゴボ〕を設け、食事、家族団らんの間となっていた。

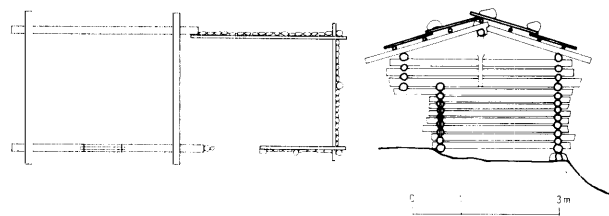


図9 当牛龍村・陶宅 (No. 4) 家畜小屋

北主屋は1965年の建造である。桁行3間のうち、北と中央の2間を1室として居間とする。北西角にはカマドを設け、煮炊きする。北間東寄りにはイロリを設け、走廊部分にあたる東面が張出した形になっている。イロリの周りにイスを並べ、家族が集まる。南の部屋は寝室とする。南主屋の完成にともない陶夫婦がそちらへ移り、北主屋は次男夫婦の住まいとなった。

北主屋・南主屋ともにケラバ板、懸魚^{げぎよ}などの妻飾りに、ナシ族独特の装飾を施す。小屋組妻壁部分はどちらも柱や束に溝を切り、手斧削り^{ちような}状の横材を落し込んでふさぐ。一部は母屋桁をうける構造材としても用いられている。

5棟の家畜小屋(①～⑤)は、いずれも切妻・平入り・累木式の建築で、梁間3m前後、桁行3～5mとそれほど規模は大きくない。1965～1970年の建造である。大工ではなく、家人が建てたものという。①のみ瓦葺とする。小屋組はいずれも束立であり、束は妻壁を挟み込むようににする。5棟のうちでは、桁行が5mと比較的大きな④のみが、桁行中央に梁をわたして棟木中央を支える。⑤は桁行一方の壁を途中より片持梁状に持ちだすが、後述する龍山郷四村の2階建家畜小屋に共通する。また、垂木を引掛垂木とする。

(4) 麗江県白沙郷玉湖村／ナシ族

麗江市北郊、玉龍雪山南麓の扇状地に立地するナシ族の村である。世帯数約250戸、人口1100人あまりの大規模な集落で、20年前に建てられた小学校もある。集落は、小学校の運動場でもある広場をとりかこむようにひろがる。建物の実測調査をおこなった李良富宅は、広場の北側に位置する。集落内をながれる水路は、山からながれる谷水をひいたもので、集落の水場もこの谷川であるという。それぞれの家には井戸はない。

住宅は中庭式の配置をとり、中庭は石敷きとしてリンゴを植えている。各戸を「庭」の観点から分類すると、以下の3つのタイプに分けられる。

A型：中庭＋裏庭＋作業庭

B型：中庭＋裏庭

C型：中庭

調査家屋の李良富宅はAタイプで、裏庭を野菜畑とし、作業庭には麦かけを立てている。BタイプおよびCタイプの家では、中庭を作業場としても使っている。

集落内の「庭」に植えられている樹木には、クルミ・リンゴ・ヒノキ(柏樹)・シユロなどがある。李宅前の小広場には直径約70cmの双幹のヤナギがあり、集落内のランドマークとなっている。

この集落の住居は、確認できた範囲では切妻・瓦葺、柱梁構造であり、三合院形式あるいはL字型の配置を持ち、いくぶん漢化した形跡がみられる。ただし、壁体は石積みのもので多く个性的である。村が玉龍雪山の麓にあるため、建築材となる石材が簡単に手に入る。

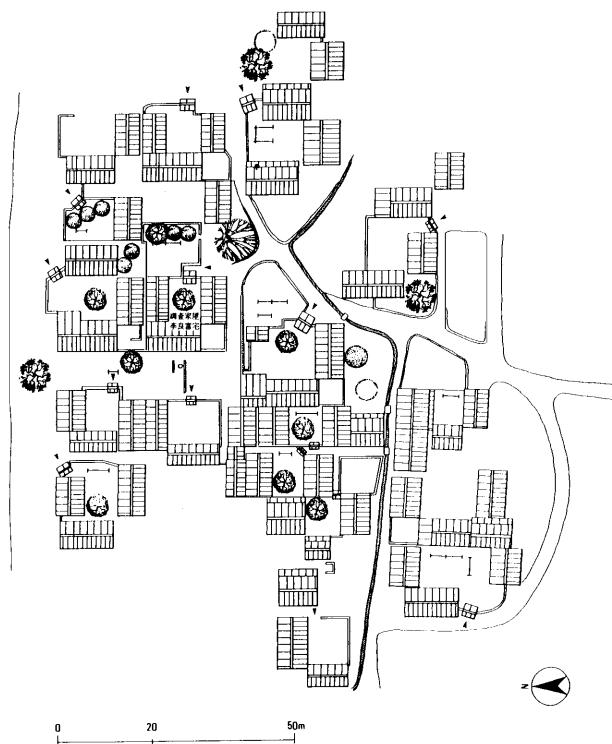


図10 白沙郷玉湖村・集落配置

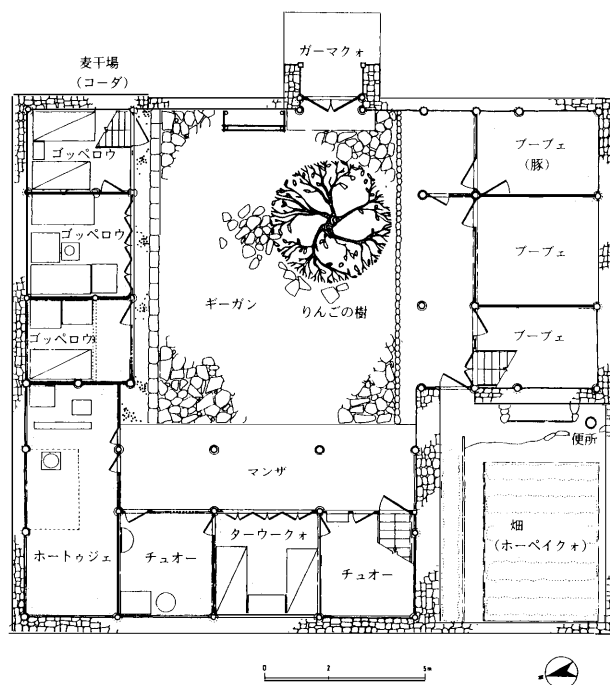


図11a 玉湖村李宅 (No. 5) 1階平面

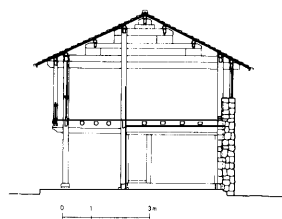


図11b No. 5 主屋断面図
(ターワークォ部分)

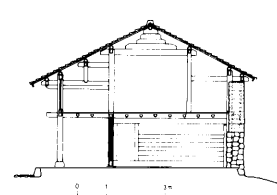


図11c No. 5 ブーブエ
(家畜舎)
部分断面図

実測家屋No.5：李良富氏宅 李宅は中庭を中心に、西に主屋、北に寝室棟である脇屋、南には家畜小屋を配する。主屋北は厨房、南は裏庭としてアブラナなどを栽培し、便所も設けている。いわゆる三合院式の平面構成をもち、漢族住居と類似するところが少なくない。主屋は60年前、脇屋はそれから2年ほど後の建造で、家畜小屋は主屋以前の建築であるという。82歳の老母、43歳の息子夫婦とその子供二人の計5人が住む。老母は他の村から嫁いできたという。

主屋は瓦葺・切妻・2階建・柱梁構造とし、3方を石壁でかこう。平面は3間構成で、前面は吹放しの走廊[マンザ]とする。漢族住宅では「堂」であり寝室とはならない中央間[ターワークオ]も、脇間[チュオー]同様に寝室として使用されている。この点、いわば形のみの漢化であり、用法には独自性があらわれている。2階は物置とする。

小屋組は梁材の上に肘木状の横材を置き、その上に再び梁を載せる形式で、束を用いない横材積上げ式架構の変種とみなせよう。棟通りを梁間中央として、中間の柱を母屋桁まで立ち上げる点で、家畜小屋とは異なる。材料には、冷樹^{ヒジ}という原産の樹木を用いる。

脇屋も主屋同様に3間構成だが、走廊はない。いずれの部屋も寝室として用いる。主屋北脇は厨房[ホートウジェ]であったが、現在カマドはなく、臨時に火盆が置かれていた。家畜小屋は主屋同様に瓦葺・切妻・2階建・柱梁構造とし、平面は前面を吹放しとする3間構成である。3方の壁は西妻を石壁、南・東は腰までを石壁、上部は日干煉瓦積みとする。1階は豚小屋[ブーブウェ]、2階は飼料倉庫として用いられる。小屋組は、梁上に横材を3段に積み重ねて棟木を支持する。この家畜小屋は主屋よりも建造年代が古く、束だけでなく肘木状の材をも用いない純粋な横材積上げの架構形式であり、古式の構造として注目されよう。

(5) 麗江県龍山郷四村／ナシ族

麗江市から寧蒗県方面に向かう幹線道路沿いに位置する。世帯数58戸、人口249人の中規模集落である。

村は複数の小集落で形成され、それぞれの小集落間には畑がひろがる。実測調査を実施した楊華英宅は、幹線道路北東の10戸ばかりの小集落内にある。この小集落は北方の丘陵地の裾野^{フスノ}にあり、北東から南西にゆるやかに下る傾斜地に立地する。各戸は隣接地との高低差を石積みと法面で処理して造成した平坦地に、住宅を中庭型に配置する。ただし、中庭をかこむ家屋間には通路程度のすき間があり、外部空間から完全に閉じているわけではない。中庭には、リングの木が1本植えられている。麦かけを立てる場所は一般に戸外で、個人の土地が共有地なのかは不明である。集落内の樹木としてはヤナギが多いが、モモ^{クオツ}(桃子)・リング・カイドウ^{ハクレン}(海棠)などの食

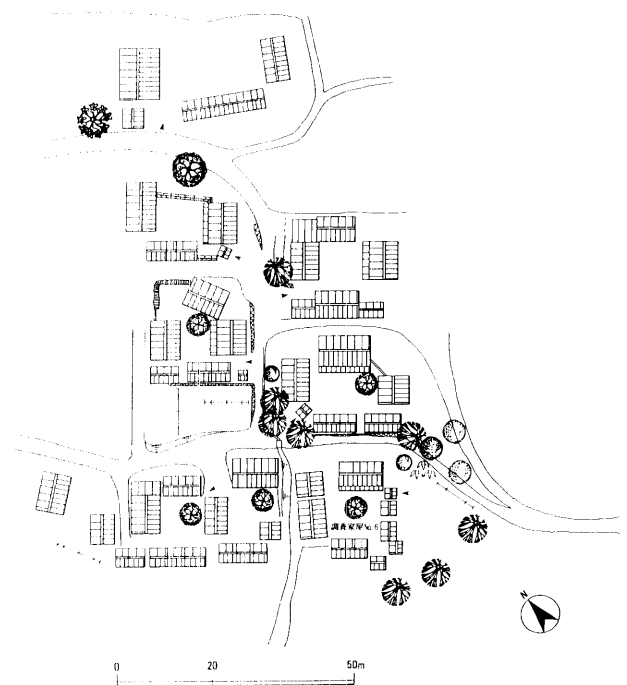


図12 龍山郷四村・集落配置

用のものもある。

住居主屋は、切妻・瓦葺・柱梁構造の2階建だが、家畜小屋などの付属屋に累木式の構法が残り、独特の集落景観を形成している。

実測家屋No.6：楊華英氏宅 楊宅は、[ヤーカー]とよばれる中庭(院子)を中心に、北に主屋、西に2棟の脇屋、南から東にかけて5棟の累木式の家畜小屋が配置され、主屋東脇に門を構える。中庭にはリングが植えられ、庭東南角には地面を掘込んだ便所が設けられる。楊氏夫妻と3人の子供が住む。

南面する主屋は1981年の建造で、瓦葺・切妻・2階建・日干煉瓦壁とする。柱梁構造で側柱、入側柱を母屋桁まで立ち上げ、棟を梁間中央に通す。小屋組は、2段重ねた大梁の上に肘木状の横木を2段重ねて二重梁を支え、棟木はこの二重梁上の^{かえるまた}髯股状の材でうける独特な形式である。この髯股状の材には幾何学的な繰形が施され、形態的には髯股を模したものとみなされるが、3個の横木を重ねている点において、累木式の架構の後退形とみることでもある。

平面は3間構成で、前面を吹放しの走廊とする。中央間[ショーショークア]も寝室として使用される点は、当牛龍村の陶宅や玉湖村の李宅などと同じである。

主屋西南に2棟並ぶ脇屋はいずれも瓦葺・平屋建である。北の脇屋は「灶間」[ゴホジエ]とよばれる。架構は棟持柱と側柱の間に束を立てて屋根を支えるもので、北面と西面は版築壁、南面は隣の脇屋の壁を取合っている。平面は棟通りを中心に、東西2室からなり、入口側にあたる東の部屋は3穴のカマドを設け、水がめを置く。

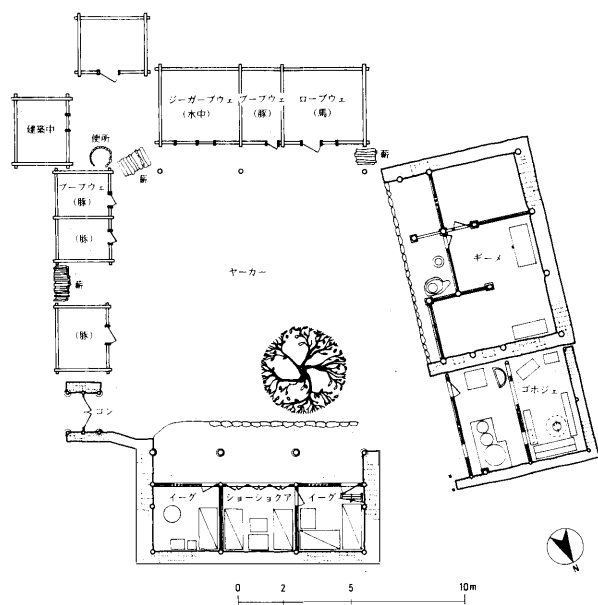


図13a 龍山郷四村・楊宅 (No. 6) 平面図

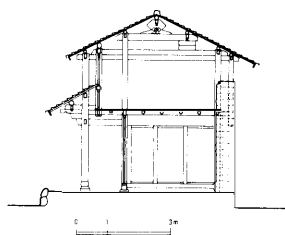


図13b No. 6 主屋断面図

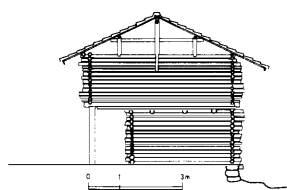


図13c No. 6 馬舎
(ローブウェ) 断面図

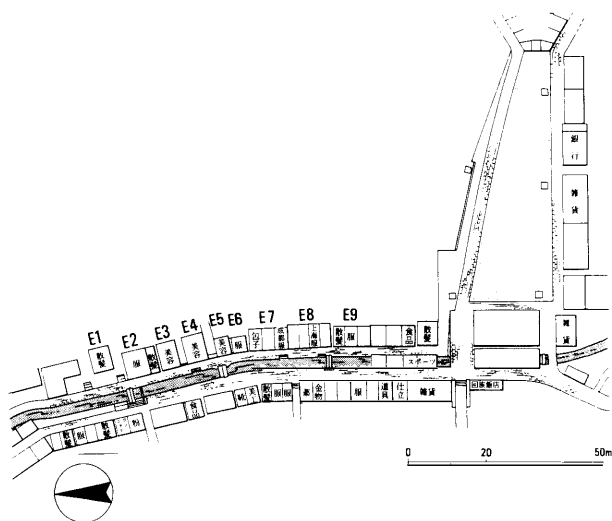


図14 麗江古城翠文段の家屋配置と職業と分布

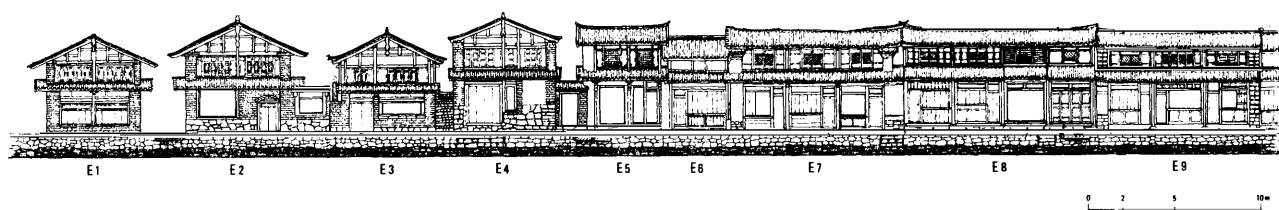


図15 麗江古城翠文段の町並み

西の部屋には北寄りにイロリが設けられ、周りには長板をわたして腰掛とし、団らんの場をつくる。

南の脇屋は「吃飯」[ギーメ]とよばれる。中庭に面した桁行3間のうち、北の1間のみ中庭側へつきでた平面で、北間と中間を1室とする。架構は棟持柱と側柱、東側の入側柱を立ち上げる穿闘式で、貫を二重にする。中央の独立した棟持柱2本を角柱とする点が個性的である。軒先の貫先端の木鼻は、上を象形、下を羊頭につくる彫刻が秀逸である。

建築中も含めて5棟ある家畜小屋のうち、主屋に対面する2階建のものは、1階を3間に仕切り、水牛・豚・馬をかこいこみ、2階を飼料置場とする。2階は主屋側を片持梁状に持ちだし、その下を束で支える。それ以外は、地面から校木丸太を積み上げる累木式の壁構造とする。校木を組む継手・仕口も巧みで、技術的にも高度な水準に達している。小屋組は梁間を4等分した束立で、棟束は妻壁を挟み込むようにして立てられる。屋根は瓦葺である。他の家畜小屋もすべて累木式構造で、小屋組は妻壁を挟み込んで棟束を立てる形式である。

(6) 麗江市新華街翠文段／ナシ族

麗江市ナシ族自治県のある麗江市は、もともと大研とよばれていた。その歴史は古く、漢代に遡る。唐代には大理を都とする南詔国に属し、元代初めには南征したモンゴル軍の一部が駐屯した。元・明・清を通じ麗江県の中心として栄え、明代には城内に千余戸の民家を擁した。明代の地理学者・徐霞はここを訪れ、著書『滇遊日記』に領主木氏の居館を「宮室の麗は王者に擬う」とたたえている。

麗江古城（城とは城壁にかこまれた町のこと）の建物は、基本的には平入りが多数をしめる。また住宅は院子を中心に、建物が配置される四合院、あるいは三合院タイプの配置を持つものが多い。通りを中心に両側に形成される町並みの景観は、軒や庇の水平線が連なり、リズムのある連続感のつよいものとなっている。壁面は、日干煉瓦を基本とするが、漆喰塗、腰に石張りを施すもの、コーナーに磚の化粧張りを施すもの、煉瓦を張り込めるものなどデザインを凝らしたものが多い。より新しいものは、磚や煉瓦を用いる傾向がある。反りのある軒や庇のライン、1階のたちの高い構成によって、日本の町並みとは異なった印象をうける。

実測家屋No.7：新華街翠文段の町並み 玉水公園よりながれる玉河は市街地北部玉竜橋で3本に分かれる。麗江古城の西北部に位置する新華街翠文段は、その支流の一つである西河が街の中央をながれ、両側の石敷きの道路に面して建物が建ち並ぶ。通りの両側に家屋が軒を連ねる町並みとは異なって、水路を軸に開放的な町並みを形成している。とくに実測調査した部分の町並みは、ケラバ板や妻飾板にナシ族独特の装飾をもつ妻入り町家が4棟連続し、平入りが続く町並みのなかで、最も個性的な景観をつくりだしている。

雪解けの清流がながれる水路には、木橋や石橋が架かり、水路端には縄が張られ洗濯物がかけられる。石敷きの洗いが設けられて、洗濯や食料を洗う人、水遊びをする子供がたえない。

この街の職種は、食堂・薬屋・金物屋など様々だが、美容院と服飾関係の店がとくにめだち、活気にあふれている。ちょっとした、ファッション・ストリートなので

ある。

(7) 寧蒭県永寧郷永寧行政村／モソ人

調査隊はまず瀘沽湖畔を通り、その北西に位置する永寧へと入った。永寧行政村は、世帯数942戸、人口5,879人で17の自然村（集落）からなる。調査したソナミ・アナ宅の属する納哈圭〔ナーハーワ〕村は戸数62戸、人口は367人で、この行政村の中心部に位置する。

実測家屋No.8：ソナミ・アナ氏宅 永寧行政村のメイン・ストリートから西に200mほど入ったところに、アナ宅は所在する。敷地は東西約50m、南北約40mで、瓦葺および松葉葺の土塀でかこう。敷地の南北両面を小路が通るが、門は南の小路にひらく。

住宅は、北に平屋の主屋、南に門屋(小客房)、東に家畜舎、西にラマ経堂を配する中庭形式のものである。ここに、現在20人が暮らしている。一部に例外的な夫方居住の対偶婚家族がふくまれ双系的な大家族に変容しつつあるとはいえ、モソ社会特有のアチュ婚を基盤にした母

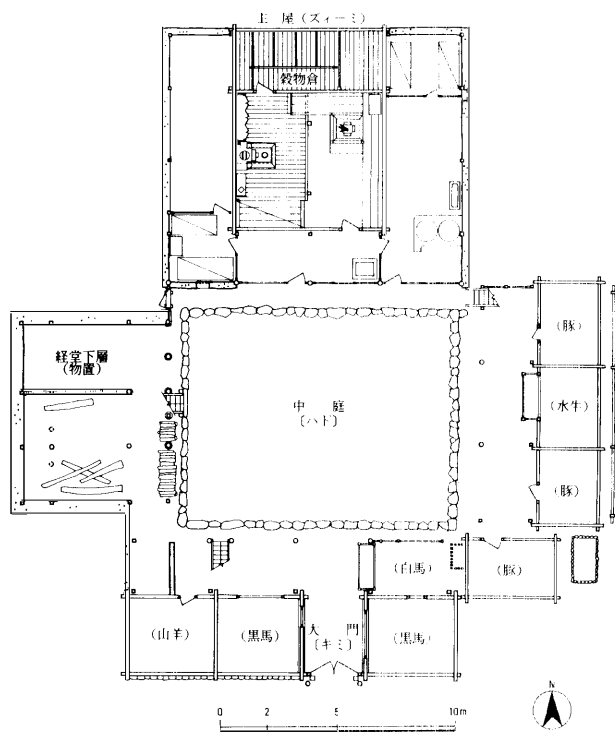


図16a 永寧ソナミ宅 (No. 8) 1階平面図

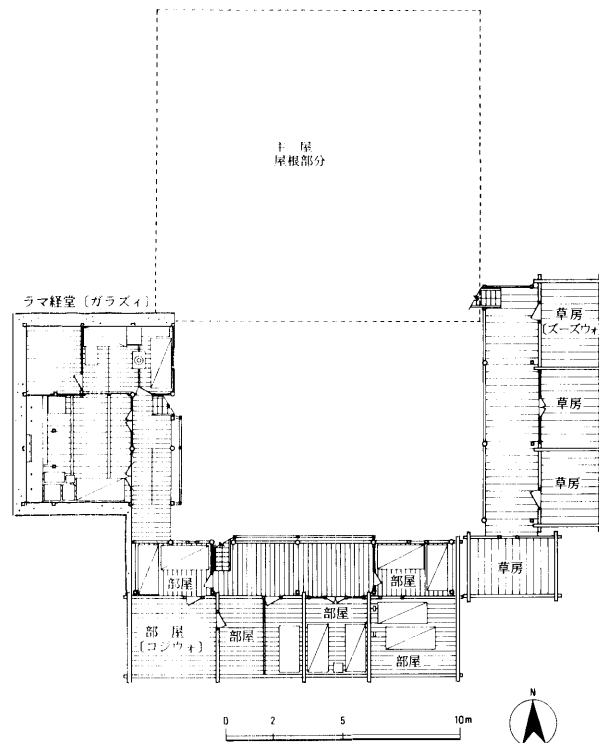


図16b No. 8 2階平面図

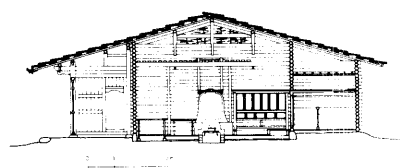


図16c No. 8 主屋断面図

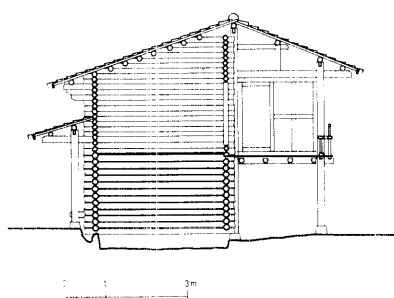


図16d No. 8 門屋断面図

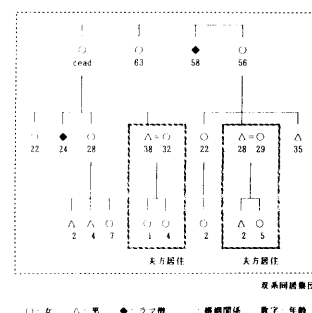


図16e 永寧ソナミ宅 (No. 8) 家族構成

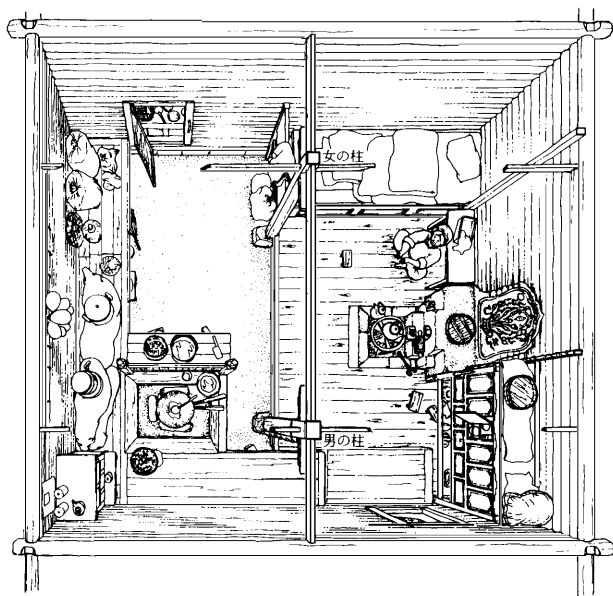


図17 永寧ソナミ宅 (No. 8) 主屋内部パース

系拡大家族の実例として注目にあたいよう。

一家のなかで最年長の女性はソナミ・ガソ氏(63)だが、彼女には子供がなく、実質的な家長の役割をはたすのは妹のアナ氏(56)である。彼女たちの姉妹(すでに死去)の子供、孫、および彼女たちの兄弟でラマ僧となったイーシ氏(58)が、本来の母系家族イトウのメンバーである。ただし、既述のように、すでに母系家族の規範を逸脱した夫方居住の核家族(いずれも4人)を2グループ包含していることにも注意しておきたい。

切妻造・板葺・平屋の主屋は60年前の建造で、6m四方の主室を中心に、四周に付属室が取りつく平面である。主室とその背後の穀物庫は壁体を累木式とし、南の前室(走廊)は軸組構造、東西妻側の部屋は版築壁構造とする。屋根は大屋根としてそのまま葺き下ろすが、前後の室は主室とはべつの引掛垂木を用い、分離された屋根構成を示す。

主室は中央で、東西に二分される。この境の北に男の柱[ドミゾ]、南に女の柱[ドミメズ]という2本の独立柱が立ち、母屋桁を支える。男の柱と女の柱は、1本の大きな松から伐りだされ、男の柱が太い根元側、女の柱は細い先端側を使う。これについては、「男は一家の根」という諺があるという。

西半部分は板が張られ、高さ20cmほどの揚床をつくる。床上では、中央西寄りにイロリが切られ、その西側に1段高く祭壇を設ける。祭壇にはカマドをつくり、鍋も置く。本来はこのカマドで煮炊きしたともいうが、今はシンボリックな存在である。礼物はこの鍋の前に供える。西壁面にはラマ教の火神[ザバラ]をまつるため、ラマ教の吉祥物を描いたレリーフが飾られる。来客がある時、女を中心とする家人は女の柱側のイロリ端、客人

は男の柱側のイロリ端に着座する。

部屋の南端、女の柱の脇に寝台が置かれる。これは女の年長者の寝台である。年をとってアチュ関係の男友達がいなくなると、女たちは自分の部屋を出て、主屋に移り住むことになる。この一家の場合、寝台で寝るのはガソ、アナはその寝台の脇の床で眠るという。東半部は土間だが、男の柱の東脇に床から60cmほど高くイロリが設けられている。このイロリは、来客が多い時に使うものという。壁とイロリのあいだ、そして東壁沿いの幅90cmほども同様に床を張る。ここには、鍋・壺・豚の薫製など様々な品物が置かれていた。

主室背後の食料庫は1段高い揚床とし、6つの貯蔵庫にトウモロコシ・アワ・麦を収めている。一方、主室前室は、中庭側を板壁とする。壁面に蓑をかけ、隅には水瓶を置く。東脇間は、南寄りに家畜の飼料を煮込む二穴のカマドを設け、中ほどには農機具を置く。北側の間仕切りは後補であり、奥の部屋は寝室とする。西脇間は南側を寝室とするが、間仕切りは後補で、北側は物置とする。これら後補の付属室を寝室とするのは、夫方居住家族のためなのかもしれないが、いまだ確認はできていない。

主屋の小屋組は家叉首風の^{いのこさす}もので、後述する瀘沽湖畔落水村でも見られた。この集落内では小規模な豚小屋に、同様の形式が用いられていたが、同じ永寧にあるソナミ・アナ宅より古いとされる親戚宅の^{しんせき}主屋は、単純な3重梁束立の架構であった。

主屋正面の門屋と東の家畜小屋は、いずれも2階建て、門屋は桁行4間、家畜小屋は3間と規模こそ異なるが、ほとんど同一の断面構成を示す。ほぼ棟通りを中心に中庭に面した前半分の走廊部分を柱梁の軸組構造、後半分を累木式とする。前半部と後半部の異なる構造は、完全に独立したシステムとして成立しており、相互の関連はない。棟木は走廊部分の柱で支えられる。小屋組の点からは棟持柱式の架構であり、累木式構造壁で棟木を支える落水村の形式とは異なる。柱梁の軸組構造が優位となったより新しい形式なのかもしれない。門屋は瓦葺、家畜小屋は板葺とする。

家畜小屋は1階に豚と水牛を飼育し、2階を飼料倉庫とする。門屋は1階東端を黄牛、つぎの1間を門構えとし、その西が黄牛、西端をやぎ小屋とする。2階は走廊部分の東西端の部屋、および累木式部分の北から2室を寝室としている。これらの寝室が、娘たちの部屋としてアチュ婚の舞台となるのである。

門屋東隣の小規模な家畜小屋も2階建ての累木式で、屋根は板葺で片流れとする。1階は豚小屋、2階は飼料倉庫として使用している。

ラマ経堂は瓦葺・切妻・2階建ての建築で、柱梁構造を版築壁でかこう。1階は床下の物置で、2階を居住空間

とする点は門屋と一致する。桁行3間のうち、南と中央の2間を仏堂とし、内部の西壁面に仏壇を設ける。入口は唐戸とし、前面を走廊とする。主屋側の北1間は、ラマ僧の寝室となっている。

(8) 寧蒭県永寧郷落水自然村／モソ人

瀘沽湖は海拔2,685m、面積約5,100ha、平均深さ40mで、透明度は14m、四方を山にかこまれ、3つの小島を浮かべる美しい湖である。この瀘沽湖西岸にある落水自然村は、校倉造の家並みを水面に映すモソ人の村で、世帯数32戸、人口225人と規模は小さい。

各住居は中庭を中心に主屋や家畜小屋、ラマ経堂を配置し畑を付属する構成で、板葺あるいは松葉葺の築地により区画される。この点は永寧行政村ソナミ宅と同じだが、主屋は中庭の西に東面して建てられ、ラマ教堂も中庭の南に建てられており、ソナミ宅の配置を90度西へ回転させた配置になっている。これは、湖岸に沿って東西にのびる集落形態に規定されたもので、結果として落水村の空間秩序は、西が優位になっている。湖岸には累木式のログハウスが軒を連ね、個性ゆたかな集落景観をつくりだしている。

実測家屋No.9：クア・ツェラツォ氏宅 門の両脇に「瀘沽湖畔風光好／摩梭人家喜事多」と記したクア家は、湖畔の道路沿いにあり、西面に主家、南面に脇棟(居住棟)、北面に家畜小屋、東面北部に経堂を配する中庭式の住まいである。中庭に樹木は植えていない。主屋の南に約80㎡の庭があり、野菜畑・花壇とする。ここにはナシ、リンゴ、花紅〔スズ〕が植えられている。敷地の南東隅にはラマ教の焼香炉〔シャウシャン・ソーガ〕を設ける。脇棟の南には、板葺および松葉葺の土塼でかこわれた南北に細長いトウモロコシ畑も付属する

クア家では、女性最年長者のツェラツォ(68)が家長をつとめる。彼女の子供は1男4女あり、長男・長女とその子供、次女とその子供の家族、ツェラツォの兄(72)の計10人が住む。やはりアチュ婚にもとづいた母系大家族を維持している。ところが、三女・四女とその家族は、それぞれ独立した対偶婚的核家族として分家し、村内の新築家屋に住む。これは娘が多すぎたためというが、このような分家形態は、今でもあまり多くないという。

主屋は100年以上前に建てられ、累木式壁構造とし、小屋組を家叉首に似た形式とする点は永寧ソナミ・アナ宅と同様である。ところが、クア家の南に位置するルオヒン家の主屋は、累木式の壁体を屋根まで立ち上げ、棟木・母屋もこの壁体の横材で支持するものであった。クア家より新しい建築物とのことだが、様式としてはより古式を示す例として注目すべきだろう。クア宅は、小屋組のやり替えがあったのかもしれない。屋根は板葺で、厚さ30mm、長さ1mほどの長方形板を2枚重ねて葺き、上面

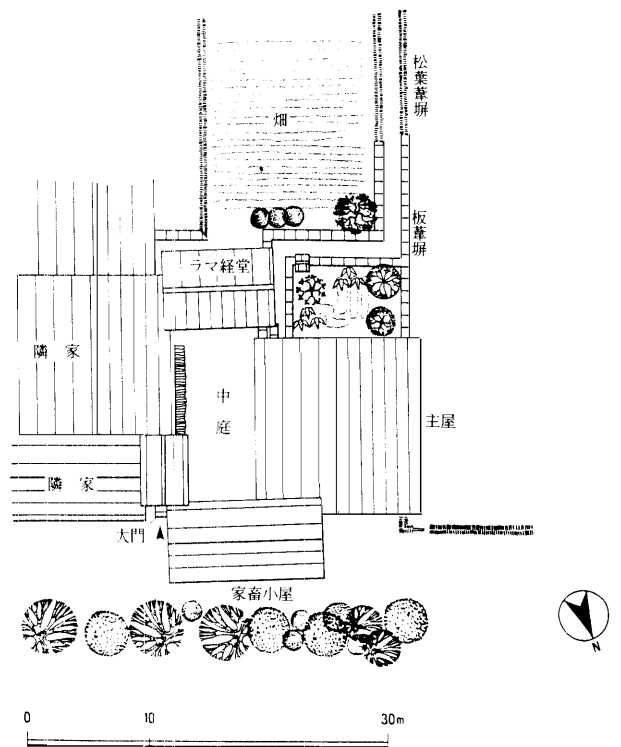


図18a 落水自然村クア家 (No. 9) 配置図

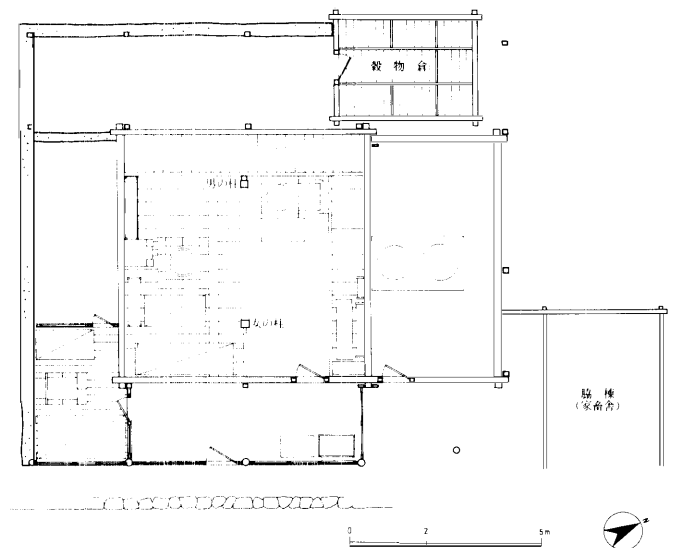


図18b 落水自然村クア家 (No. 9) 主屋平面図

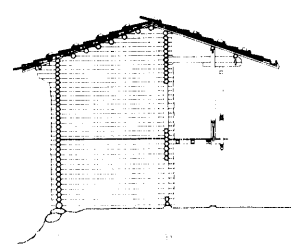


図18c No. 9 家畜舎断面図

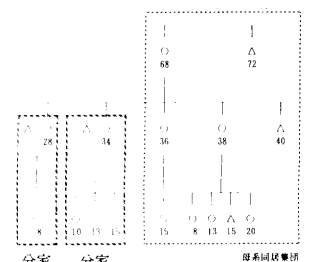


図18d 落水自然村クア宅 (No. 9) 家族構成

を石でおさえる。

主室の平面は、中央の「男の柱」と「女の柱」を境界に、南半部を揚床として中央にイロリを切り、北半部は土間として西端に1段高いイロリを設ける。板間のイロリの脇には祭壇があり、壁面にはやはり「ザバラ」をまつる装飾が浮彫りされる。この祭壇はカマドをともしない。板間東端の寝台は現在はツェラツオの孫たちが使用し、ツェラツオはイロリ端のベッドで寝ている。若干の差異がみられるものの、空間構造はソナミ宅の主室と同じ原則に則っているといえよう。

主室周囲の付属室は、軸組構造を基本とする。北脇間、北西角の食料庫は壁体を累木式とし、南脇間、西背面の倉庫は版築とする。北脇間には中央に家畜用の2穴のカマドを置く。南脇間は東南角を間仕切り寝室とするが、その他は物置として使用される。北西角の食料庫は、やはり揚床でトウモロコシや米を貯蔵する。

脇屋2棟は1階を家畜小屋、2階を寝室とする。主室と同年代だが、1階の材は新材に替えている。中庭に面

した走廊部分のみ柱梁軸組構造、後半分を累木式とし、棟木は後半部分で支える。ソナミ宅よりも古式にみえる手法といえよう。累木式部分の軒は、校木を肘木状に持ち出して軒桁をうける。

実測調査した主屋東南の脇屋は、桁行方向を1階は5室、2階は4室に累木式の壁で仕切っており、1階と2階の間仕切りが一致していない。1階は家畜小屋で、2階は一部を寝室とする以外は倉庫とし、トウモロコシなどを貯蔵していた。

ラマ教経堂は、木造・切妻・瓦葺・柱梁構造・版築壁・2階建の構成である。2階を経堂とし、1階は居室とする。この村にラマ僧はいないが、村人すべてがラマ教を信仰しており、どの家にも経堂がある。調査当日、ルオヒン家で読経していたラマ僧は、前日調査した永寧ソナミ家のイーシ氏であった。

(9) 大理市中陽和村五社／ペー族

大理古城の南郊にあるペー族の村。村はずれの畑のなかに、陽和塔という密檐式の磚塔がある。年代は不明だが、南詔国時代にまで遡る可能性もあるという。この村は石造の集落であり、建築以外でも道路が石敷舗装、水路は切石でふたをして暗渠とするなど、石づくしの景観がみえるものを圧倒する。

住宅は壁体が石造だが、屋根は草葺か瓦葺である。石壁は30~40cm程度の偏平な石を積み上げるが、隅は切石を用い、井楼積みとするものが多数をしめる。新しいものでは、壁体を切石の化粧積みとして、隅を柱形状につくりだして漆喰塗の化粧目地とするものもある。石積みのままの壁が多いが、漆喰塗仕上げとするものもみられた。屋根は、ケラバをみせる単純な切妻（いわゆる「懸山」^{シユアンシヤン}式）とするものもあるが、妻壁を卵建状に立ち上げた「硬山」^{インシヤン}式のほうが主流をなす。妻壁天端の処理は、草を載せるもの、石材薄板を載せるもの、瓦を載せるものが見られる。

実測家屋No.10：陳漢氏宅 4世帯が暮らす陳漢家は、9棟の建物からなる。主屋の南・東・北西に中庭を置く複合中庭式の配置をみせる。中庭には石敷が施され、植栽はない。主屋南の中庭では、刈り取った麦を地干しし

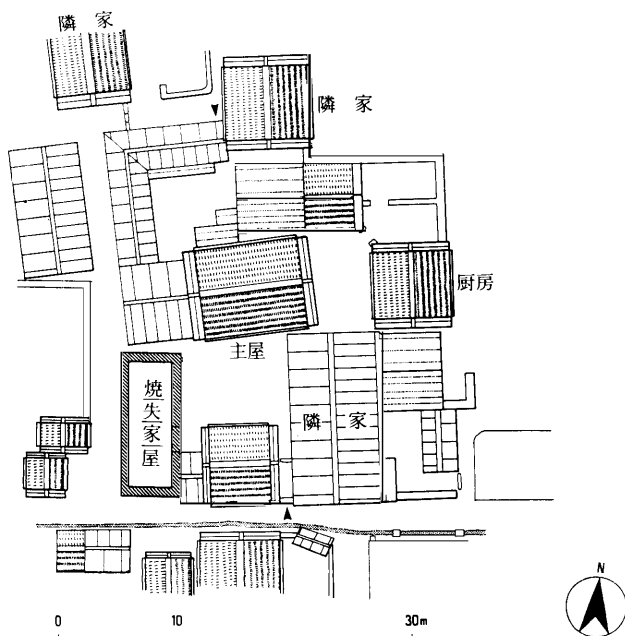


図19a 大理市中陽和村・陳宅 (No. 10) 配置図

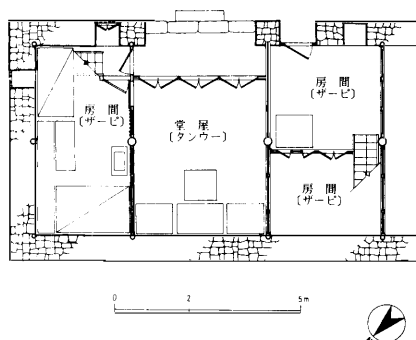


図19b No. 10主屋1階平面

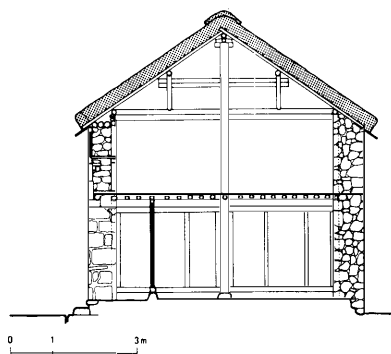


図19c No. 10主屋2階平面

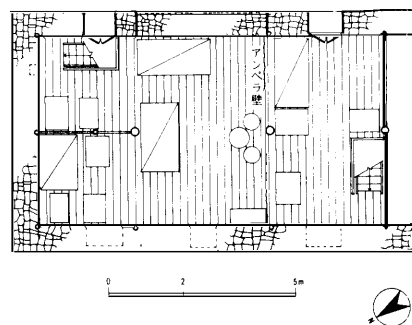


図19d No. 10主屋断面

ており、作業スペースとしても重要な役割をはたしていた。主屋はし字型の敷地中央に位置する。主屋をかこむように、南に納屋、東に厨房、北に家畜小屋等が配置され、家屋はいずれも切妻・柱梁構造・石造壁からなる。主屋西南の脇屋は1988年に焼失し、現在は壁体のみが残る。陳家は、もともと父系大家族だったが、現在は5つの小家族に分家している。主屋には陳漢氏の家族8人が住む。

実測調査した主屋は草葺・切妻・2階建て、100年以上前の建造であるという。木造柱梁構造を基本とするが、自然石を積み上げる厚さ70cmの石壁は軒回りの荷重をうけており、焼失した西南の脇屋を見ると、壁付の柱は2階床のやや下から立ち上がっていた。なお、西面は壁を抜いて増築され、1段高く瓦葺の屋根を架ける。この増築部分の小屋組は、横材積上げ式で束を用いない。屋根東面妻壁は卯建状に立ち上げる。軒先には鉄平石状の薄板石材を水切として入れ、石材の接合部には丸瓦をかぶせる。

平面は3間構成で、1階中央は堂屋〔タンウー〕とし、北壁中央に祖先をまつる祭壇を設ける。寝室は西側の房間〔ザーピー〕で、東側の房間は奥を間仕切り、物置としてイモを貯蔵している。2階は西房間との境をアンペラで間仕切る2室構成で、寝室であるとともに、穀物を保存する籠や櫃が数多く置かれていた。

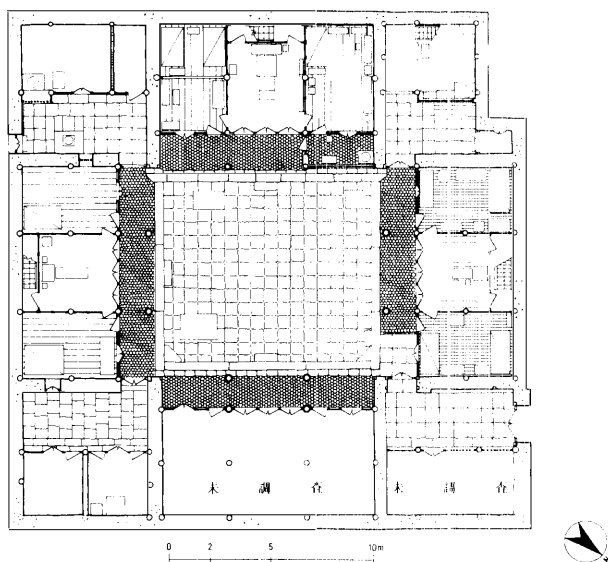


図20 喜洲鎮市戸街・張宅 (No. 11) 平面図



写真4 喜洲鎮市戸街・張宅 (No. 11)/主屋2階から中庭をみる



写真5 喜洲鎮市戸街・張宅 (No. 11)/主屋軒まわり

(10) 大理市喜洲鎮市戸街／ペー族

喜洲鎮は大理城の北郊に位置する。古くからの街道沿いの裕福な商人町として栄え、古い町並みをよく残しており、すでに雲南省の老城保護区にも指定されている。喜洲鎮の集落は、中央北西寄りに位置する四方街から東西南北に延びる通りを中心に構成される。今回の実測調査した張承祖宅は、四方街の南方、町を南北に抜ける通りに沿い、市戸街に所在する。

実測家屋No.11：張承祖氏宅 張宅は、中庭（院子）を中心に四方に建物が配置され、四隅に小さな天井を設ける四合院的な屋舎構成をとる。この配置は「四合五天井」とよばれる大理ペー族の典型的な配置形式であり、喜洲鎮の富裕商人の邸宅の代表例でもある。

この住まいには、現在、張姓3家族と蘇姓1家族の計4家族が暮らしている。主屋に住む76歳の張承祖氏は一人暮らしであり、子息は町を出ているとのことである。建物は100年以上まえのもののというが、おそらく民国時期の建築と思われる。

中庭〔天井〕に面する主屋〔正房〕、南側の対屋〔倒房〕、脇の対屋〔廂房〕の4棟はいずれも中央を広間〔堂屋〕、左右を寝室〔臥室〕とする3間構成の平面である。堂屋奥の壁面には祭壇を設け、先祖の写真や位牌をまつる。〔北廂房〕では、堂屋2階にも祭壇を設けていた。建築はいずれも本瓦葺の柱梁構造で、壁は石積みに漆喰塗とする。正門を構える北側壁面は六角形の磚を張り化粧目地を入れて飾られ、中庭四隅の底上に立ち上げる壁も漆喰仕上げで装飾されている。

主屋の小屋組は、棟持柱と二重梁の複合形式で、二重梁は線形装飾を施した臺股状の材で支えられる。小屋梁は材を2段に重ね、1階底の梁は3段に重ねる。これら梁材は木鼻付だが、とりわけ1階底の木鼻や梁の側面に、獅子などの動物や草木の美しい浮彫・彩色を施す。材料は松である。〔倒房〕〔廂房〕も、基本的に同一の構造形式をとっている。

(11) ラサ市チョゴ村／チベット族

チベット自治区の首都、ラサ市の郊外農村チョゴ村で、チベット族の住居を調査した。

実測家屋No.12：シャマ氏宅 日干煉瓦の壁にかこまれた中庭型住宅で、北東側に寝室を2室並列させ、その北側に厨房を置くが、ここのカマドは現在使用していない。門と連続する西側のブロックは増築にともなう領域とみなされ、南から北へ鶏舎・厨房・物置を配する。カマドはこの新しい厨房のものをを使う。カマドの張りついた壁には、サソリの絵が描かれており、これが火神を象徴するという。

構造はNo.3のイ族農家に近く、日干煉瓦積み壁と柱を併用して上部荷重を支える。柱の上部では2重に舟肘木を重ね、母屋桁をうける。2重舟肘木の技法は、チベッ

トにおいて住宅から寺院・宮殿まで、共通してみられる。屋根はわずかに勾配をつけた土葺の陸屋根で、軒先にのみ水切の石板をまわす。

シャマ宅は、現在5人家族。建物の年代はわからないが、さほど古くは遡らないだろう。

4. 小結と予察

4-1. チベット・ビルマ語族の住居形式

(1) 祖型としての組積構造

建築構造の点からみると、いわゆる組積構造という大きな枠組によって、この地方の住居形式を一括することが可能なようである。もっとも、それは、

①石積みもしくは日干煉瓦積みなどによる厚い構造壁を持つタイプ

②校倉風の累木式構造壁を持つタイプ
に大別される。

①の形式の代表はNo.3のイ族農家であり、壁は版築壁に変容しているが、独立した被荷重柱を持たない壁立ち・陸屋根の構造とする。No.3の所在する南華県大堂子村では、この種の「土掌房」がNo.2のような漢式住宅にどんどん駆逐されつつある。これが、まさしくイ族農村の現代的変貌であり、注目されよう。

No.3に最も近いのはNo.12のチベット族農家で、日干煉瓦壁と2重舟肘木を載せた独立柱を併用する陸屋根の中庭型住居である。このような厚い構造壁を持つ「壁立ち」の住居形式は、とくにチベットや四川のチベット族農家に卓越することが知られてきたが〔江道元 1985, 葉啓榮 1989〕, 雲南においてもイ族を中心に広い分布域をもつようで、これを「羌」文化の要素とみることも不可能ではない。

ひとつ参考となるのは、雲南の新石器時代住居址に関する李昆声〔1985〕の見解である（注4）参照）。李は、元謀・大墩子や賓川・白羊山で出土した「木骨泥牆」（木舞状のフレームに泥土を塗り込んでつくる構造壁）式の平地住居址を、中原仰韶文化・馬家窑文化の家屋址と系譜関係のある「羌」系の文化要素とみなした。とすれば、木骨泥牆か石積み・煉瓦積みかはべつにして、チベット・ビルマ語族にみられる分厚い構造壁の技法そのものは、新石器時代以来の「羌」文化の伝統を反映する要素と解してよいのかもしれない。これについては、筆者自身、先史住居址と少数民族建築の比較から両者の系譜関係を論じたことがあるが〔浅川 1992〕, やはり今後の調査によって雲南のデータを集積させるとともに、中原や西域の土着建築も視野におさめて、比較研究を展開していきたいと考えている。

(2) 累木式構法の問題

さて、もうひとつの組積構造、すなわち②の累木式構法については、楚雄イ族や麗江ナシ族では、もっぱら家

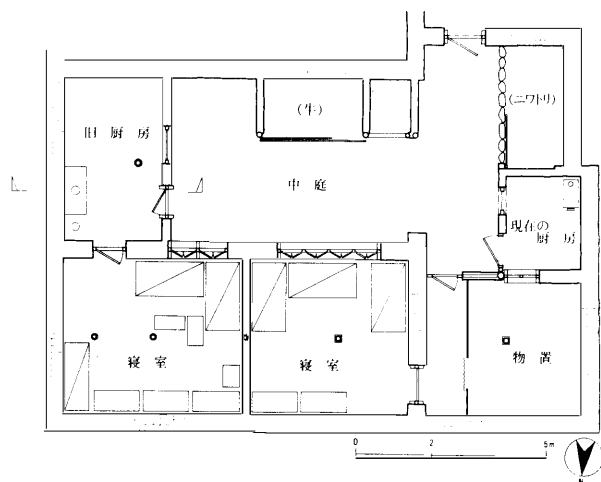


図21a ラサ市チョゴ村・シャマ宅 (No. 12) 平面図

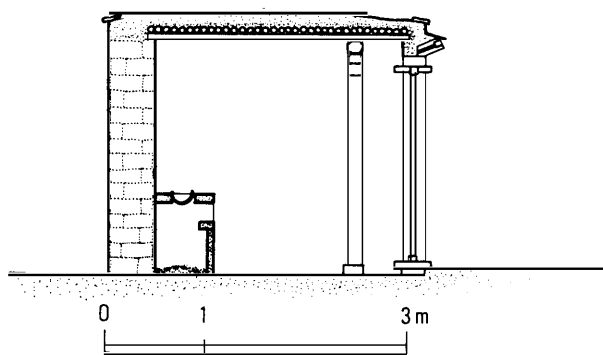


図21b No. 12 旧厨房部分断面図

畜小屋にしか使われず、継手・仕口の技術も貧弱なものであったが、永寧のモソ人やその近隣地域である小涼山のイ族は、ラマ経堂以外のあらゆる屋舎にこの構法を用い、横木の接合技術も精巧なものであった。

さて、この場合、注目せざるをえないのは、前漢の晋寧・石寨山墓で出土した青銅製貯貝器にみえる家屋の表現であろう〔浅川 1988〕。周知のように、貯貝器蓋に鑄造された3棟の祭祀家屋模型は板校倉式、器腰部に浮彫りされた2棟の穀倉は丸太校倉式の高床建物で、床の上下をすべて累木式の壁構造とする点は、今のモソ人の小客房となんら変わらない。

こうしてみると、累木式構造の家屋が消滅したり、家畜小屋にしか残っていない地域でも、かつてはこの種の構法によって主要家屋を建築していた可能性があり、しかもその分布地域がそうとうひろかったことを想像できよう。

問題は、石寨山青銅器文化にみられる校倉風の構法が、必ずしも「南方」的な要素とはみなせず、やはり「羌」系の文化要素として、北から南下してきた可能性が大きいことである。これについては、すでに稲葉一八が、石寨山出土遺物にみられるスキタイ系美術様式の影響を指摘する白鳥芳郎〔1976(1985)〕などの見解を参考にしな

がら、累木式の構法も「羌」系の古遊牧民によってもたらされたと解釈している〔稲葉 1990〕。

たしかに累木式構造の家屋は、ヨーロッパ全土から東北アジア、アラスカの狩猟採集民まで北方ユーラシアを中心に卓越した分布を示している〔太田 1983, 1989〕。中国では、新疆ハザック族や内蒙古エヴェンキ族などの遊牧民が冬小屋に使い、内蒙古や黒龍江のオロチョン族は倉庫に用いてきた。雲南の近くでは、石造と累木式構造を併用した四川チベット族住宅の報告がある〔葉啓楽

1989〕。また、清の杜昌丁『蔵行紀程』に「^{カキ}屋は全ての木を横に^{カベ}重ねて用い、四面に^{カベ}壁をつくる」という記載があり、チベットにも累木式住宅が存在した〔村田 1931〕。

木壁組積造家屋の場合、発掘によって遺構を検出することは困難であり、「木骨泥^{でんぱ}牆」式家屋のように先史時代の実例を確認できないため、起源や伝播に関する早急な結論をくだすのは危険をとまなう。しかし、以上にあげた民族誌例と、井戸や木槨墓などまでもふくめた考古遺物を総合的に検討し、西北雲南にみられる累木式家屋構造の系譜をさぐる事が、今後の大きな研究テーマとなるだろう〔浅川 1993〕。

4-2. 母系社会の居住様式

住まいの空間構造や建築技術だけでなく、永寧モソ人母系社会の居住様式を調査することが、本研究のもうひとつの軸となる課題であった。残念なことに今年度は、No. 8とNo. 9の2例しか調査できなかったが、いずれもアチュ婚を基盤とする母系大家族の原理を継承しつつ、No. 8では夫方居住家族を包含した一種の双系的大家族に変容しており、No. 9では新婚夫婦が分家し、べつの住宅を新築して居住する傾向がみられた。

今後の継続研究においては、モソ人本来の居住様式と住居空間の係りを復元的操作をふくめて考察しながら、居住様式の変化と、その変化がもたらしつつある住居空間の機能や意味の変質を解説することに力をそそぐことになるだろう。

《注》

1) この地域の少数民族建築に関する先行業績として、とくに重要な位置をしめるのは『雲南民居』〔雲南省設計院 1986〕である。また最近、九州産業大学と雲南省設計院の共同研究として、イ族やペー族の民家の調査がおこなわれた〔浦野(編) 1992〕。しかし、これらの先行研究が、とくに「チベット・ビルマ語族の居住様式と建築技術の解明」という視野をもっているわけではない。この点が、我々の研究と大きく異なる点である。

2) このほか『雲南簡史』〔馬曜(主編) 1983〕、『雲南地方沿革史』〔龍中 1990〕などの概説書も参考になるが、とくに万国瑜『中国西南歴史地理考釈』上・下〔1987〕が羌の部落についても詳述している。なお、雲南少数民族の漢文史料については、万国瑜『雲南史料目録概説』第1～3冊〔1984〕が目録として便利であり、最近、この業績にもとづいて『雲南史料叢刊』全20巻の出版がはじまった〔万国瑜(主編) 1990～〕。

3) 羌系諸族の分布については、我々の共同研究者である何耀華氏に詳しい論考がある〔何 1988ac〕。その研究によれば、遊牧／被愛／火葬などを共通の文化要素とする羌系の地方集団は、新疆、甘肅、青海、チベット、四川に分布していた。なお、何氏はべつの論考〔1988bc〕で、一般に同一視されがちな古羌人と古藏(チベット)人が異なる民族であることを主張している。

4) 李昆声は、雲南省の新石器～銅石併用時代にみられる竪穴住居址および「木骨泥^{でんぱ}牆」式壁構造の平地住居址を、中原と共通する羌系の文化要素としている。これについては、最近筆者も少数民族建築との対比から南中国全域の先史住居址を再検討し、李の意見を支持する見解を発表した〔浅川 1992〕。

5) 注意しておきたいのは、元謀人に代表されるように、雲南北部には旧石器時代以前から人類が居住していたことである。このような先住民と羌の混血民族として、ナシ族の形成を解釈する新説がよく最近発表されている〔郭太烈 1991〕。

6) 言語の数と民族の数は、必ずしも一致しない。たとえば、ギャロンは四川のチベット族、ザイワはチンポー族の一支である。また、言語の特定と分類は学者によっていくぶん異なり、たとえばS.R. ラムゼイは、中国のチベット・ビルマ系言語は16で、それらをチベット語派、イ語派、チンポー語派(中核言語)、チャン語派に分けている〔1990: p. 315-316〕。

7) 西北雲南の少数民族に関する最も一般的な概説書として、廖頌(編)〔1989〕がある。民俗・自然だけでなく、プミ族・ナシ族・ヌー族・リス族の住居・集落に関する報告・写真が掲載され、建築史的にも活用可能な書として評価できよう。

8) チャン(羌)語支という意見と、チベット(藏)語支という意見に分かれている。

9) 雲南ではないが、四川省渡口市のリス族住居については、すでに報告がある〔陳顯寶 1990〕。渡口リス族は解放前まで、洞窟を住まいとする「野人」的生活を続けていたといい、近年でも「千脚踏地」式とよばれる屋根だけの素朴な家屋を住まいとする。

10) 現在の中国民族政策においては、いまだ一つの民族とは決められないが他の諸民族とも異なる集団を「○○人」と仮称する。雲南ではモソ人のほかに、イ族系のサニ人、ハニ族系のアイニ人などがいる。

11) 永寧に隣接する四川省の塩源・塩辺・木里などのモソ人社会にも、母系制が根づき残存している〔四川省編輯組 1987〕。

12) 周知のように、中国の社会科学・歴史学はいまだにマルクス主義的唯物論に立脚しているため、母系を父系に先行する社会形態に位置づけている。このため、母系の遺制を残す永寧モソ社会は、中国内部でも早くから注目を集め、詳しい調査がおこなわれてきた。とくに代表的な報告として詹承緒(等)〔1980〕、嚴汝嫻・宋兆麟〔1983〕、《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員會(編)〔1983, 1986, 1988〕、雲南省編輯組〔1986〕をあげておく。

13) 本報では、調査で採集された民族語彙はカタカナで近似的に表記する。この場合、他の外来語などと区別するため、〔 〕で当該語彙をかこむことにする。以下、すべてこの原則を適用する。

【参考文献】

浅川滋男

- 1988 「西南中国及び東南アジアの青銅器文化における家屋面と家屋模型」『研究論集』VIII, 奈良国立文化財研究所
- 1991 「海南島の住まい ― 一 梁居・覆盆・分棟型住居 ―」『日中文化研究』2号
- 1992 「南中国の先史住居 ― 発掘遺構にみる住まいの多様性 ―」『奈良国立文化財研究所公開講演会資料』
- 1993 「雲南省・永寧モソ人の住まい ― 母系社会の居住様式と累木式建築構法に関するフィールド・ノート ―」『創立40周年 ― 文化財論叢II』奈良国立文化財研究所(近刊)

稲葉 一八

- 1990 「雲南省にみられる校倉造の源流について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』

浦野良美(編)
 1992 『中国雲南の伝統的民家に関する建築計画及び環境工学の調査研究』九州産業大学
 雲南省建工庁設計院
 1963 「洱海之濱の白族民居」『建築学報』第1期
 雲南省建築設計院
 1984 『雲南民居』中国建筑工業出版社
 雲南省編輯組
 1986 『永寧納西族社会及母系制調査』雲南人民出版社
 詹承緒・王承權・李近春・劉龍初
 1980 『永寧納西族的阿注婚姻和母系家庭』上海人民出版社
 太田邦男
 1983 「世界の木造架構法の分布とその地域性」
 『新住宅普及住宅建築研究所報』
 1989 「九太組の源流を求めて ―ユーラシア大陸における木壁組積造の起源―」『ログハウスのすすめ』建築資料研究社
 何耀華
 1988a 「試論古代羌人的地理分布」『思想戦線』第4期
 1988b 「古代羌人與藏区土著居民の融合」『中国藏学』第3期
 1988c 『中国西南歴史民族学論集』雲南人民出版社
 郭大烈
 1991 「納西族形成的多元論」『雲南社会科学』第2期
 系舟
 1989 「納西族源流小議」『雲南文物』26号
 嚴汝嫻・宋兆麟
 1983 『永寧納西族の母系制』雲南人民出版社
 江道元
 1981 「彝族民居」『建築学報』第11期
 1985 「藏族建築」, 張馭賓(主編)『中国古代建築技術史』科学出版社
 四川省編輯組
 1987 『四川省納西族社会歴史調査』四川省社会科学出版社
 白鳥芳郎
 1976 「石寨山文化の担い手 ―中国西南部にみられるスキタイ系文化の影響―」『季刊どるめん』10号
 1980 『華南文化史研究』六興出版
 朱良文
 1984 「麗江古城與納西族民居」『建築師』17号
 朱良文(主編)
 1988 『麗江納西族民居』雲南科技出版社
 蕭默・羅鈺
 1985 「雲南少数民族建築」, 張馭賓(主編)『中国古代建築技術史』科学出版社
 宋兆麟
 1964 「雲南永寧納西族の住俗 ―兼談仰韶文化房子的用途―」『考古』第8期
 戴裔煊
 1948 『干蘭 ―西南中国原始住宅の研究―』嶺南大学西南社会經濟研究所印刊
 張增祺
 1987 「“摩沙”源流考略」『雲南文物』22号
 陳顯實
 1990 「渡口民族建築調査」, 張馭賓・郭湖生(主編)『中華古建築』中国科学技術出版社
 馬寅(主編)
 1987 『概説・中国の少数民族』君島久子(監訳), 三省堂
 馬学良等(編)
 1989 『彝族文化史』上海人民出版社
 馬曜(主編)
 1983 『雲南簡史』雲南人民出版社
 村田治郎
 1931 「東洋建築系統史論(二)」『建築雑誌』545号

＜白族簡史＞編写組
 1988 『白族簡史』雲南人民出版社
 廖頤(編)
 1989 『雲南西北の少数民族 ―暮しと文化をさぐる旅―』北京外文出版社
 方国瑜
 1984 『雲南史料目録概説』第1～3冊, 中華書局
 1987 『中国西南歴史地理考釈』上・下, 中華書局
 方国瑜(主編)
 1990 『雲南史料叢刊』第1巻, 雲南人民出版社
 包爾漢(主編)
 1986 『中国大百科全書 民族』中国大百科全書出版社
 麦克漢(Charles F. Mkhann)
 1991 「骨與肉：納西伝統建築空間結構中体現的宇宙觀和社会關係(Fleshing Out the Bones: The Cosmic and Social Dimennsions of Space in Naxi Architecture)」, 郭大烈・楊世光(編)『東巴文化論』雲南人民出版社
 ＜民族問題五種叢書＞雲南省編輯委員会(編)
 1983 『納西族社会歴史調査』雲南民族出版社
 1986 『納西族社会歴史調査(二)』雲南民族出版社
 1988 『納西族社会歴史調査(三)』雲南民族出版社
 葉啓榮
 1989 『四川藏族住宅』四川民族出版社
 ラムゼイ, S.R. (高田時雄・他訳)
 1990 『中国の諸言語 ―歴史と概況―』大修館書店
 李光灿・陳旭光
 1990 『雲南少数民族人口概論』雲南人民出版社
 李昆声
 1985 「論雲南與黃河流域新石器時代文化的關係」『史前研究』第1期
 ＜僳僳族簡史＞編写組
 1983 『僳僳族簡史』雲南人民出版社
 龍中
 1990 『雲南地方沿革史』雲南人民出版社
 ＜麗江納西族自治县概況＞編写組
 1986 『麗江納西族自治县概況』雲南民族出版社

＜研究組織＞

主査	浅川 滋男	奈良国立文化財研究所	主任研究官
委員	田中 淡	京都大学人文科学研究所	助教授
〃	江口 一久	国立民族学博物館	助教授
〃	小野 健吉	奈良国立文化財研究所	主任研究官
〃	溝口 正人	名古屋大学大学院	博士課程
〃	何 耀華	雲南省社会科学院	院長
〃	楊 昌鳴	天津大学建築系	講師

協力 濱島 正士 国立歴史民俗博物館 教授
 〃 杉本 和樹 西大寺フォト(カメラマン)

図面作成協力

小野 薫・勝山文代・川口純代・北野陽子・佐野友里江・松田輝哉・森広みどり・冬野雅子・王惠君・徐嘉聆